

異なる文化と出会う
開発人類学調査法

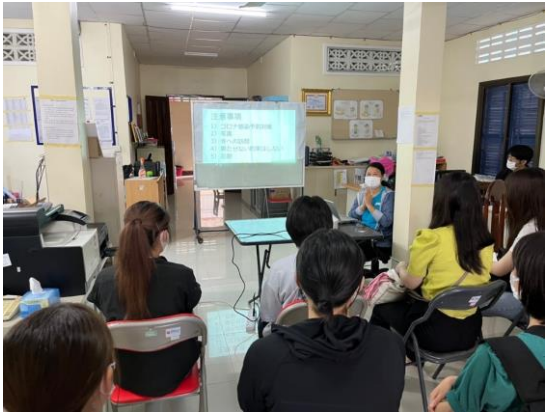
2022 年度カンボジア・スタディーツアー報告書

カンボジア農村の**教育状況**

コンポンチャム州にて

2022/12/31

埼玉大学教養学部







ごあいさつ

カンボジア・スタディーツアーの授業は、2010年から正規の授業としてスタートしました。コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年および2021年において実施できませんでしたが、今年は多くの方々のご協力のもとで、3年ぶりに無事に実施することができました。この授業は、本学全学教育テーマ教育プログラム「社会と出会う」の授業の一つである「異なる文化と出会う」および教養学部現代社会専修とグローバルガバナンス専修の授業「開発人類学調査法」（2015年度までの「フィールド科学調査法」）として、またカンボジアで活躍されている日本のNGOピープルズホープジャパン（PHJ）でのインターンシップとして、開講されたものです。例年の担当教員は埼玉大学教養学部の三浦敦教授でしたが、今年から私、サムレトと交代で開講することとなり、今年は私が担当しました。本報告書は学生たちが提出した期末レポートをまとめたものです。

今までと同じように、この授業はPHJカンボジア事務所の協力のもとで実施されました。PHJのプロジェクトサイトは2015年からカンボジア東部のコンポンチャム州に移動されたため、私たちの授業もその年から、その州にて実施することになりました。スタディーツアーでは、学生たちに聞き取り調査を実施してもらい、得られた結果を現地の方々およびPHJスタッフの前で報告してもらいました。また、調査を準備するために、現地に赴く前に、三浦教授の協力のもとで東南アジアとカンボジアの歴史と社会的特徴、そして国際協力とカンボジア農村の教育に関する基礎知識について、事前学習を行いました。さらに、スタディーツアー中は、カンボジアの文化および社会の理解を深める目的で、シェムリアップ州のカンボジア文化を代表する歴史的な世界遺産である、アンコールワットやアンコールトムも見学しました。プノンペンではトゥールスレン虐殺博物館、キリングフィールド、カンボジアを代表する王立法律経済大学や王立プノンペン大学も見学しました。また、日本に留学したことがあるカンボジア人研究者および実業家にお話をお伺いしました。

今年は、8人の学生が参加しました。幸い、期間中に体調を崩した学生はいませんでした。大きなトラブルも無く順調に行うことができました。調査結果を発表する前日に、学生たちは発表の準備のために、夜遅くまで起きて作業していました。一日一日と学生たちが成長していくのがよく分かる授業でした。学生たちにとっても印象深いカンボジア滞在となったようで、今後も引き続き同様の授業を続けて欲しいという声が上がりました。

このように好評で終えることができたのも関係者の皆様のご協力があったからです。特にPHJの南部さんと石山さん、ピースインツアーの小山さん、オークンツアーの横須賀さんにはお礼を申し上げます。この授業は今後も実施したいと考えておりますが、今年度のような成果が上げられるように私たちは一層努力して参りたいと思います。

2022年12月31日

埼玉大学教養学部准教授 サムレト ソワンルン

謝 辞

この授業は多くの方々の協力によって実現できました。ここに記してお礼を申し上げます。

まず、現地での受け入れをお認めくださったピープルズホープジャパン（PHJ）にお礼を申し上げます。特に PHJ 東京事務所の南部道子さんには、説明会やツアーの企画の段階からサポートして頂きました。現地でもツアーの付き添いとして様々な場面においてアドバイスおよび支援を頂きました。このスタディーツアーは南部さんのご協力なしには実現しませんでした。

また、PHJ カンボジア事務所長の石山加奈子さんおよび PHJ のカンボジア人スタッフのチュム・シノルさん、ルン・ソキアさん、そしてドワーク・ソポンさんには、現地の関係者へのインタビューをアレンジして頂いたほか、自動車の手配や通訳などもして頂きました。調査期間中に、学生たちは他の PHJ カンボジア事務所のスタッフの方々とは夕食をご一緒することもでき、カンボジア文化および社会について色々なお話しをお伺いすることができました。

私たちの面会のお願いに暖かく応じて下さったコンポンチャム州クトアイ4村、ウープロロス小学校、OML 中学校およびサムデク・チュオン・ナート高等学校の皆さんにも大変お世話になりました。私たちのインタビューに親切に答えて下さって、感謝いたします。大変勉強になりました。

日本に留学したことがある王立プノンペン大学の准教授で名古屋大学のプノンペンサテライトオフィスのディレクターでもあるンガウ・ベンホイ先生には、貴重な時間を頂き、カンボジアの社会および経済の現状について講演をして頂きました。感謝いたします。また、同じく日本に留学したことがあるソクスレングさんおよびリナさんにも、多忙の中、わざわざ食事会に参加して頂き、カンボジアの社会およびビジネスの状況についてお話しをして頂きました。お礼を申し上げます。プノンペンにある王立法律経済大学の見学を案内して下さった佐藤怜奈先生に感謝いたします。また、夕食会・交流会には、インターンシップ参加でプノンペンに滞在していた埼玉大学教養学部4年生の青木由奈さんにも参加して頂きました。

スタディーツアーの全般の手配では、株式会社ピースインツアー（PIT）に大変お世話になりました。特に小山耕太さんには旅行の全般にわたっていつも柔軟で有用なアドバイスを頂き、感謝いたします。また、現地のオーケンツアーの横須賀愛さんと、現地ガイドを勤めるポウキーさんには、私たちのために、いつも和やかな雰囲気を作って下さったことに、お礼を申し上げます。滞在中に、安全で快適な運転をしてくださったバスの運転手のマップさんにも感謝いたします。

この授業においてガイダンスの段階から事前学習まで一般的に大きなサポートをして頂いた教養学部の三浦敦先生にも大変感謝しております。

最後に、この授業を支援して下さった埼玉大学教養学部および埼玉大学学務部全学教育課にお礼を申し上げます。

目 次

ごあいさつ

謝辞

授業の概要

(サムレト ソワンルン) 1

カンボジア農村地域の教員不足について

(教養学部・笠原 優希) 5

カンボジア農村調査

(教養学部・山内 玲菜) 11

農村における教員不足の原因についての調査

(教養学部・山城 星) 18

カンボジアの農村における教育の在り方

(教養学部・武藤 清佳) 25

教育の実態と就学率上昇への課題

(教育学部・木村 有紗) 32

カンボジア農村部の教育の現状と求められる支援の在り方とは

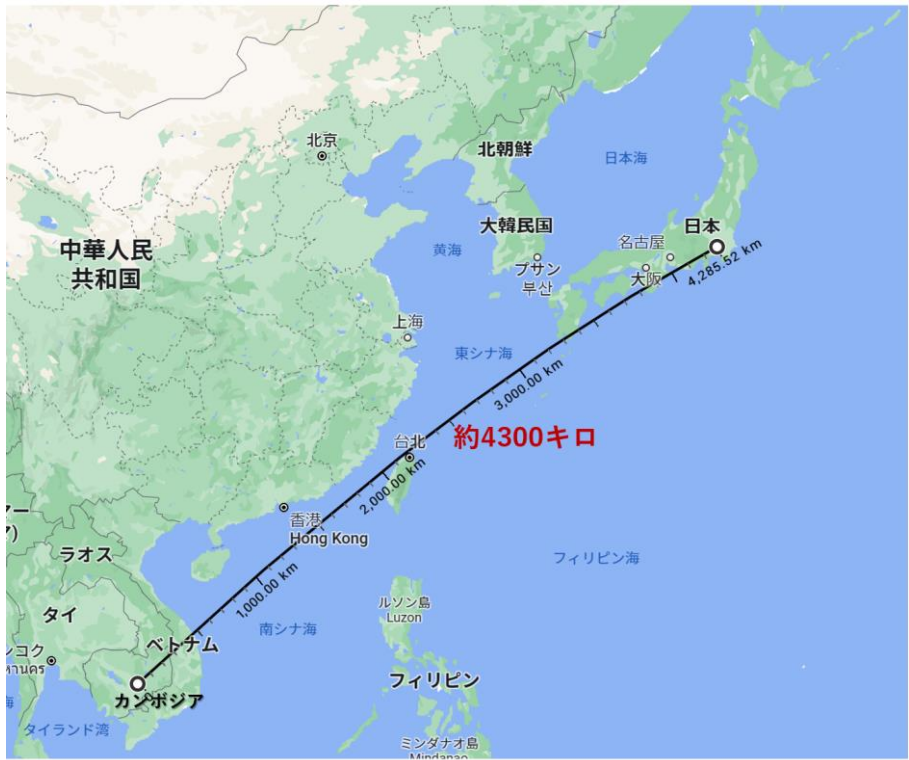
(教育学部・菊地 優菜) 38

文化と教育が融合することの可能性

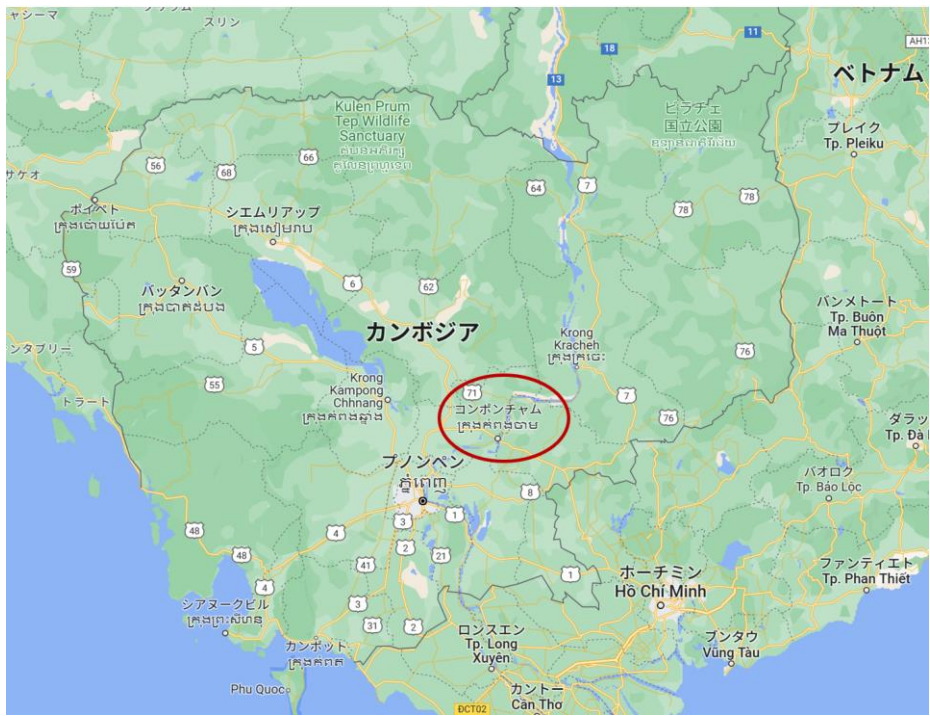
(教養学部・久慈 綾香) 45

初等教育・中等教育におけるドロップアウトの原因と教育の影響について

(教養学部・菅沼 瑞生) 53



日本からカンボジアへの距離



調査地 コンポンチャム州

授業の概要

サムレト ソワンルン

「異なる文化と出会う／開発人類学調査法」の授業は、異文化を理解するとはどういうことかを実際の現地調査を通して理解することを目的としている。その狙いは、学生たちに日常的に接することがない異なる文化を持つ世界の人々（特に、途上国）に直接出会わせ、その現状に触れることを通じて、日本では見られない独自の問題や異なる考え方に目を開かせ、自分たちの住む世界を客観的に見る視点を養うことにある。また、自分の体で現地の人々と学ぶ楽しさを体感し、言葉や文化の異なる人々とコミュニケーションをとる能力を養うことも目的としている。

とはいえ、「異文化に接して異文化を理解する」という目的はあまりにも漠然としている。そこで、この講義では特定のテーマを取り上げて、そのテーマについての調査を通じて異文化に接し、人々の生活の理解を試みてもらうこととなった。コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年および2021年は実施できなかったが、過去には、「生計戦略」、「出稼ぎ農民」、「資源利用」や「公衆衛生」などをテーマにして調査を行ってきた。今年は、農村部の人々の「学校教育」をテーマとして取り上げることとした。農村部における人々の教育水準、学校教育の現状や、農村の人たちが教育に対してどのように認識しているのかなどについて調べようとしたのである。

この授業は現地調査を主眼としているが、その旅行費用は学生の自己負担によるという、経済的なハードルが高いものであった。しかしそれにもかかわらず、8人の学部生が授業に参加してくれた。もちろん、彼らがいきなり現地に行っても調査ができるわけではない。そこで、2日間の事前学習を行い、異文化を理解するとはどのようなことなのか、カンボジアはどのような歴史的背景と社会的特徴を持つのか、カンボジアおよび東南アジアにおける学校教育の現状はどのようになっているのか、といった点について、その基礎知識を学んでもらった。カンボジアには1週間滞在し、農村部において、3つの班に分かれて聞き取り調査を行い、日本帰国する前に調査結果をまとめてPHJカンボジア事務所で報告してもらった。また、プノンペンでは日本に留学をしたことがある王立プノンペン大学の准教授で名古屋大学のプノンペンサテライトオフィスのディレクターでもあるペンホイ先生にカンボジアの社会および経済の現状について講演をして頂いた。さらに、同じく日本に留学したことがあるソクスレングさんとリナさんにはカンボジアの社会およびビジネスの状況についてお話しを伺うことができた。帰国後、レポートを提出してもらい、報告会も実施した。ピープルズホープジャパン（PHJ）東京事務所の南部道子さんと株式会社ピースインツアー（PIT）の小山耕太さんも報告会に参加して頂いた。

現在、カンボジアは急速な経済発展の中にある。首都プノンペンには次々と高層ビルが建ち、中産階層や富裕層が急速に成長していることがうかがわれる。プノンペンに日本資本により2014年にイオンモール第1号店が誕生し、2018年に第2号店が、2022年には第3号店が開業した。比較的高級店が並ぶイオンモールは、そうした中産階層や富裕層を引きつけて深夜まで大変な賑わいを見せている。しかし、そうした首都の急速な発展の一方で、農村は必ずしも首都の発展に追いついていないとは

言えない。一般的に生活水準の面でも教育水準の面でも都市部と農村部との格差が大きい。そこで、カンボジアにおける農村部の教育の現状を理解するために、今年の調査は農村部の「学校教育」をテーマにして実施された。主な調査地域はコンボンチャム州のクトアイ4村というゴムのプランテーションが多く占めている地域で、プノンペンの発展ぶりに比べたら、現代的な生活インフラは十分に整っておらず、まだ昔ながらの生活風景が多く残っている。また、学校教育の現状を理解するために、私たちはその地方にある公立学校であるウープロロス小学校およびOML中学校を訪問し、校長先生、教員および学生たちにお話しを伺った。さらに、一般の公立学校の現状や教育活動と比較するために、今回は、仏教学校であるサムデク・チュオン・ナート高等学校の関係者にもインタビューし、興味深いお話しをして頂いた。

事前学習（8月9日・8月10日）

- 8/9 異文化を理解するとはどのようなことか、東南アジア社会の概要と歴史、カンボジアの歴史（アンコール朝の特徴、ベトナム戦争とカンボジア内戦）、カンボジア社会の特徴（カンボジア農村の社会構造、現代カンボジアの抱える社会問題）
- 8/10 国際協力と農村開発、カンボジアおよび東南アジアにおける教育の現状、学校教育をめぐる農村調査の方法、調査計画の立案と報告、カンボジアでの実際的注意

スタディーツアー（9月3日～9月10日）

- 9/3 日本出国、カンボジアのシェムリアップ市到着、アプサラ・ダンス見学、シェムリアップ市内見学
- 9/4 アンコールワット見学、アンコールトム見学、コンボンチャム州へ移動、コンボンチャム市内見学
- 9/5 PHJカンボジア事務所（コンボンチャム州）訪問、PHJカンボジア事務所による説明会、調査対象の村と学校訪問・3班に分かれての聞き取り調査、PHJカンボジア事務所の方々との交流会
- 9/6 調査対象の村と学校訪問・3班に分かれての聞き取り調査（続）、調査結果のまとめ作業
- 9/7 PHJカンボジア事務所での各班による調査結果の報告、PHJカンボジア事務所の方々との交流会、プノンペンへ移動、プノンペン市内見学
- 9/8 王宮見学、メコン河畔散策、プノンペン駅見学、王立法律経済大学見学、トゥールスレン虐殺博物館見学、セントラルマーケット見学、交流会、講演会「カンボジアの社会および経済の現状」（王立プノンペン大学・ペンホイ先生）
- 9/9 キリングフィールド見学、王立プノンペン大学見学、カンボジア出国
- 9/10 ホーチミン経由で日本帰国

報告会（9月26日）

- 9/26 参加学生各人による調査結果の最終発表会、レポート提出

3年ぶりに実施した今年のスタディーツアーは、私たち教員と参加した学生にとって色々な刺激となった。学生たちにはカンボジアという国と文化に関心を持ってもらうことができたように思う。また、カンボジア滞在中に、学生たちの積極的な行動、調査地域の学校の関係者や村の住民に接する際の誠実な姿勢および学生たちが成長する姿を見て、改めて今の若者たちの可能性が再認識できた。9月7日に現地で実施した調査結果の報告会では、PHJカンボジア事務所長やスタッフの皆さんに学生たちの調査結果を高く評価して頂いた。大きなトラブルも無く順調に行うことができた今回のスタディーツアーは、特に、PHJの南部道子さんと石山加奈子さん、PITの小山耕太さん、オーケイツアーの横須賀愛さん、現地ガイドのポウキーさん、運転手のマップさん、そして参加学生たちのおかげである。今後も良いスタディーツアーを期待したい。

カンボジア農村地域の教員不足について

教養学部 20LL036 笠原 優希

1. はじめに

カンボジアは2011年から5年連続でGDP成長率が7%を超えるなど、順調な経済成長を遂げている。しかし急速な経済成長を果たしたのは都市部のみで、都市部と農村部の所得格差が拡大しているのが現状だ。またそれに伴い都市部と農村部の教育格差も広がっていて、農村部における教員不足も問題となっている。初等教育において、教員は都市部に集中している。農村部・遠隔部の就学者数208万3157人に対し都市部の就学者数は37万7978人と、都市部の就学者数は全体の15.4%にすぎないが、都市部の教員は1万138人に上り、全体の21.1%を占めている。州別に見ると、他と比べてプノンペン特別市や、プノンペン特別市に隣接しているカンダール州では就学者数に対して教員数が多く、教員が都市部に集中しているといえる(平山:2008 p211)。中等教育になると初等教育より地方と都市の格差が拡大している。全体の15%の学校が都市部に位置し、全体の30.2%の学生が都市部に集中しているため就学機会が都市部に偏っている傾向がある(平山:2008 p214)。教員数も27173人いるが、約三分の一の9487人が都市部の教員である(平山:2008 p215)。教員が不足すると教育の質も悪くなる可能性がある。そのためこのレポートでは、なぜカンボジアの農村地域の教員が不足しているのかについて実際にコンポンチャム州で行ったインタビュー調査を基に考察したい。

2. 調査結果

インタビュー調査は2022年の9月5日と6日にコンポンチャム州のブレアンドン村で行われた。インタビューしたのは11人で、小学校の校長、中学校の校長と教師、中学生3人、村長2人、都市へ出稼ぎに行っていた人3人である。

最初にインタビューしたのは中学校の校長と教師である。校長はコンポンチャムから出勤していて、先生は地球科学を7~9年生(中学1~3年生)に教えている。この中学校の生徒数は男子が88人、女子が110人で、合わせて178人である。この学校で利用する教科書は足りているが、文房具は足りていない。これは都市から遠いためだからである。また、学校の建物はアジア開発銀行による寄付で建てられ、メンテナンスなどに関しても寄付によって賄われるという。しかし寄付は生徒数が多い学校から優先的に行われるため、生徒数が多い方が有利となり生徒数が少ない学校の場合、十分な設備が提供されない場合がある。また毎年20%の人が退学してしまうそうであるが、その中で女性より男性の方が多い。これは男性の方が出稼ぎに行ったり、家の仕事を手伝ったりする可能性が高いからである。また学校で利用する文房具を買える経済力があるかということも退学率に関連していて、買うことができないと学校をやめてしまう人もいるという。

次にインタビューしたのは2人の男女の中学生である。男子生徒は15歳で、女子生徒は16歳で

ちらも9年生(中学3年生)である。中学校の授業は午前中 7:00~11:00 で、午後は 14:00~17:00 だという。月曜日と火曜日は午後の授業があるが、水曜日から土曜日は午後の授業がない。その2人の生徒の家は学校から遠く、道の状態も悪いため、通学に時間がかかると答えていた。

女子生徒は朝と休みの日はいつも家族の手伝いをして、ゴムの木からゴムを集めている。男子生徒はリュウガンやジャックフルーツに水やりをして休みの日はマーケットにゴムを売りに行く。女子生徒は3時に起きて家族の手伝いをしてから学校に行く。男子生徒は5時に起きて学校に行く。女子生徒は水曜日から土曜日の学校の後に私塾に行き、英語、数学、物理、クメール文字を学んでいるという。女子生徒の将来の夢は空港で働くことで男子生徒は兵士であるそうだ。二人ともコンポンチャムから離れ他の街に行くことを望んでいて、友達はプノンペンなどの中心地に行きたい人もいるそうだ。

次にインタビューしたのは、小学校の校長である。この小学校の生徒数は125人で、男子生徒が75人、女子生徒は49人だという。彼はコンポンチャム州出身で高校を卒業した後に、教員養成学校に行き、教員になったという。2002年からこの学校で個人契約として働いていたが、その時は車が通れる道さえなかったという。その後教員になるための試験を受けて別のところで働いていたが、教員が足りない、また遠い故に誰も教員になりたがらない現状を見てこの地域の教員になろうと決意したそうだ。2012年から校長を務めているが、2015年から2019年の間に校長として勤めながら大学に通いなおしたようである。それまでは教員団体の団長などをしていた。

地方において教員の給料が特に低く、月4000円くらいだという。教員は足りておらず、調査した小学校も政府から認められた正式な教師が3人、個人的な契約を結んでいる教師が2人で、これでも足りていない状況である。また文房具も足りておらず、模造紙やノートは教員が自分で用意することもあるという。教室も足りていないため、午前は1~3年生が授業を受け、午後は午前中に家の手伝いをする4~6年生が授業を受けている。しかし朝早く起きて畑仕事をして、その後に学校に行くため、疲れて学校に行く気力がなく欠席し、それを繰り返していくうちに退学してしまう生徒もいるという。退学する生徒は年数人ではあるものの退学率は高めであるという。

一日目の最後にインタビューしたのは、村長である。彼は男女5人ずつの10人家族で暮らしている。コンポンチャムの地方の村出身で、生まれてからずっとコンポンチャムに住み、村人からの投票で村長になった。ゴムの木の土地を5ha持ち、たいいてい毎日午後2時までゴム畑の汁を取る作業をして生活している。ゴム畑では労働者は雇っておらず、たまに子供に手伝ってもらおうという。子供は全員学校に通っているそうだ。

彼は教育の制度的な問題として教員が兼業可能なことを取り上げた。給料が少ないため、先生が学校とは別で塾を経営することができる。先生の給料が少ないことも問題であるが、自分の塾に通う生徒に良い成績を出す傾向があり、そうすると子どもは先生の経営している塾に行くため家計の負担が増えるという別の問題が生まれている。家計の貧困も原因で、子供を学校に通わせると労働力が減ってお金を稼げなくなってしまうので、労働をさせ子供が学校に通えなくなるという。しかし教育面は以前と変化しており、学校の建物が木造からコンクリートになった。また教員数も増加してはいるが、まだ足りていないという。また公衆衛生も改善され、以前は病気になったら祈るだけであったが、病院設備が作られ適切な処置が行われるようになったそうだ。

彼はコンポンチャムから出たいと思ったことはないそうです。理由として、畑などの生活基盤をすでに持っているから、また移動するにも費用がかかると答えた。生活基盤があればどこにいても同じ、移動する理由がないと言った。

二日目の最初にインタビューしたのは中学生の女子生徒である。彼女は16歳で7年生（中学1年生）である。コンポンチャム州出身で学校から5キロ離れたところに住んでいる。6人家族で現在は4人で住んでいるという。将来の夢はコンポンチャムのこの村で歴史の教師になることである。知識を子供達に提供したいと思っていて、家族と一緒にいたいからこの村から出たくないという。友達はプノンペンで法律家、医者、教師、エンジニアになりたいと言っていた。

彼女が抱える問題は、彼女が勉強するためのお金を父親が稼ぐことができないことであるという。彼女は学校以外の時間は私塾に通っているが、それはお金がかかるものである。父親は農家であるが、女子生徒が私塾にかかるお金がないため兄妹に借りているという。

次にインタビューしたのは村長である。彼の出身はコンポンチャムであるが、今回インタビューしたところとは違う村出身だという。4人家族で結婚してからずっとこの村に住んでいる。村長と、ボランティアで村の保健支援団体・ヘルスセンターコミュニティの3つ仕事を兼任している。普段はゴムの樹や農作物の世話をしており、農作物を育てているから他の場所に移住することは考えていないと言っていた。2人の娘がいるが、一人はコンポンチャム州で結婚して子供もいるため、学校の選択肢がたくさんある都市に住んでいる。もう一人の娘は現在大学2年生だが、都市では様々な言語を学べ、私塾も多いことから学ぶ機会が田舎よりも多く、仕事もあるため働きながら学校にも行けることから、農村に戻るつもりはないという。

しかし20年前と比べて村の状況も大きく変化したそうだ。20年前は高校がなく、道の状態も悪いものであった。しかし2014年にヘルスセンターができ、妊婦の検診が行われるようになった。また4年前に電気が通ったという。教育面では両親が教育の重要性を理解するようになり、先生たちも両親に対して教育を受けさせることを推奨している。彼はこれからも村人に対して情報の共有を続けていきたく、教育に対してより理解してもらえるように推奨したいと語った。

次にインタビューしたのは出稼ぎから戻ってきた女性である。彼女は24歳でコンポンチャム州出身である。男性5人女性6人の11人家族で、7番目の子どもだという。学校には8年生（中学2年生）まで通ったそうだ。2017年にプノンペンの工場で6カ月働いていた。その後2022年の2月までコンポンサムの中企業オンラインカジノでお金を集める人(cashier)として働いていた。2022年6月から現在まで、プノンペンでネイルやヘアメイクの学校に通っている。技術を身につけ、それを使ってお金を稼ごうと思っているそうだ。学費に関してはカンボジアの港町コンボンソムで働いたときに貯めていた貯金から出しているという。コンボンソムに戻る気はないが、自分のネイルを売りに行きたいと思っているそうだ。

彼女が抱える問題は子供が多いため勉強するために十分な助けが得られなかったこと、働いていた時に適切な給料が払われなかったことがあるそうだ。また、現在も家族と自分の分の生活費を稼ぐ必要があるが、お金が十分ではないという大きな問題を抱えている。



図1：インタビューの様子

最後にインタビューしたのは出稼ぎから戻ってきた親子である。母親は45歳で、15歳の時に結婚し、家族を支えるために働いていたので学校に通ったことがないそうだ。娘19歳で9年生（中学3年生）まで学校に通っていた。家族は男性3人、女性5人の8人家族でコンボンチャム州出身だという。最近ではゴムの木の汁を売って収入としているという。午前中は自分のゴム畑で、午後は雇われているゴム畑で家族全員働き、休みはないという。

母親は2016年から2022年まで息子と一緒にタイのガス会社に出稼ぎに行っていた。戻ってきたのは3ヶ月前だという。借金をしていたため出稼ぎに行き、借金完済した後に戻ってきた。5年間で家に戻れたのは一回だけで、その間は娘が家事をしていたという。学校にも行かなければならないのに、家族の手伝いもしなければならず両立は大変だったと答えた。娘はコンボンソムで今年の7月に1ヶ月間、兄弟姉妹も一緒に飲食店で働いていた。コンボンソムに行った理由は、コンボンソムの方が稼げるからだという。娘の将来の夢は、家で小さなお店を開くことであり、コンボンソムに行ったときに違う土地で暮らすのは大変だと感じたそうで、コンボンチャム州に残って家族と暮らしたいと答えた。

二人は現在の教育・ヘルスケアシステムについて、小学校・中学校・高校、そして保健センターもあり、十分であると答えた。しかし設備や本が不足していて、トイレはきれいではないとも答えた。また以前と比べて村は、道路が整備され、電気が通り、タクシーが使えるようになり、街の中心部に行かなくても周辺に小さな店があるため買い物しやすくなり便利になったと答えた。

3. 考察

インタビューの結果から、教員不足の原因は大きく分けて4つあると考えられる。まず一つ目は貧困である。お金がないため働かなければならず、学校の勉強がおろそかになってしまう。お金がないため塾に通えない生徒や、必要な道具を買うことができないために学校をやめてしまう人もいるとインタビューを通して分かった。また出稼ぎのために別の場所に行くので学校を辞めてしまう生徒もいる。学校での教育を十分に受けたことの無い人は、教員になることができず、また教員になろうと思

うこともないのではないだろうか。このように貧困であることで、教育よりもお金が優先され教育を十分に受けられず、教員志望も減っていくことが教員不足の一つ目の原因であると考えた。

二つ目は、村のインフラが整備されていないことである。道路が整備されているとはいえどかなり状態が悪い道で、車に乗りながらかなり揺れると感じた。またインタビューした村は都市から遠く、行くまでも時間がかかるうえに状態が悪い道を何時間もかけて通勤したいと考える教師は少ないだろう。村に住むと言ってもやはり都市から遠いために物を調達できないことや、電気も4年前に来たと村人は言っていたことから、都市と比べるとかなり不便であると言える。このような村にわざわざ都市から移住する教師は少ないだろう。農村地方のアクセスの悪さやインフラがまだきちんと整っていないことが、教員不足の二つ目の原因であると考えられる。

三つ目は、学校の設備が整っていないことである。中学校の校長は、都市から遠いため、文房具などが揃えられていないと答えていて、教師が自費で授業に使うものをそろえていると小学校の校長は答えていた。中学校には誰でも読むことができる本が置いてあったが、数もかなり少なく図書館と呼ぶには程遠いものであった。また建物もきれいではなく、出稼ぎから戻ってきた女の子はトイレが汚いと言っていた。また教室も足りていないという。建物の修繕や建築には寄付が利用されているが、これは生徒数が多い学校から優先されるということなので、人数が少ない農村の過疎地域などは後回しにされやすく、十分な設備が完成されるまでに時間がかかるだろう。このように、授業をする設備が十分ではなく、教師の負担も大きいところで授業をしたいと思う人は少ないだろう。学校の整備が未発達なことも農村の教師不足の原因であると言える。



図2：中学校の空き教室

最後の原因は教師の待遇が悪いことである。小学校の校長によると地方の教員の給料は低く、一カ月に4000円くらいだという。そのため教師も副業をして稼いでいるという。また上で述べた通り、教育の環境が整っていないために必要なものを教師が自費で用意することもある。またトイレなどの衛生設備が十分ではないような環境で毎日教師も働かなくてはならないため、負担が大きいだろう。アクセスも悪く、職場環境も整っていない場所で、低賃金で働きたいと思う人は少ないと言える。実際に小学校の校長も、誰もこの場所で教師をやりたがらないのを見て教師になったと言っていたことから、過酷な環境で働こうとする人は少ないのだろう。このように教師への待遇の悪さが教員不足の四番目の原因であると考えた。

4. まとめ

以上のことから、カンボジア農村の教員不足の原因は、貧困でお金がないこと、村の立地とインフラ整備が未発達であること、学校の設備が十分でないこと、教師へ待遇が悪いことの四つであると考

えられる。

今回の調査を通じて、何も心配することなく当たり前勉強をすることができる自分の環境がどれほど貴重なことであるかということを実感した。実際に自分よりも幼い子が、生活のために朝から働いて学校に行っていたり、遠い場所で働いてなんとかお金を稼いでいたりすることを見て衝撃を受け、自分はなんて恵まれているのだろうと感じた。教育を受けたくても諦めている人が多くいることをより実感し、今以上に自分の環境に感謝して生活していきたいと思った。

参考文献

平山雄大 2008 「カンボジアにおける学校教育の諸段階 —各教育段階の量(アクセス)の拡大に着目して—」 『早稲田大学大学院教育研究科紀要 別冊 16号—1』 2008年9月 pp207-217
2022年9月23日 [KyoikugakuKenkyukaBessatsu_16_01_020_HIRAYAMA.pdf](#)

カンボジア農村調査

教養学部 20LL154 山内 玲菜

1. はじめに

本稿では、9月5日から9月6日にかけて行なったカンボジアでの農村調査について問いを立て、結果と考察を述べる。

まず、「農村における教員不足」を調査のテーマとして取り上げ、「なぜ農村で教員不足が起こっているのか」という問いを立てた。

現状として、カンボジアの首都であるプノンペンでは教員数が10,037人に対して生徒数が239,163人、農村があるコンポンチャム州では教員数4,859人に対して生徒数が283,270人で、コンポンチャム州の方がプノンペンよりも教師1人あたりの生徒数が多く、教員不足であると言える。この現状を踏まえて、教員不足の理由として、農村よりも都市部の方が生活環境・給料が良い、農村における教員の待遇があまり良くないという仮説を立てた。また、農村で生まれ育った人が農村の教員として働くことはあっても都市から農村へ働きに来る人は少ないのではないかと考えた。

コンポンチャム州での調査方法はインタビューであり、調査対象は中学校の教員、校長、生徒、小学校の校長、村長、都市部や他の国へ出稼ぎに行った人、の計11人である。

2. 調査結果

(1) 中学校の校長先生（男性）・教員（男性）

勤務している学校の生徒数は男子78人女子110人であった。男子の数が女子よりも少ないのは、家族を支えるために他の国へ出稼ぎに行くなどして働いているからである。また、教員数は6人で全員がコンポンチャム市から通勤している。先生になる時に、教師になる前の教員養成学校で成績が良ければ希望の勤務地へ勤めることができるが、成績順に希望が通るため、成績が悪い人は抽選で勤務地が決定する。もしくは、直接自分の行きたい学校の校長などに話し、派遣として契約してもらう方法もある。学校の現状としては、建物を修復するための資金はアジア開発銀行の寄付からであり、生徒数が多い学校から優先的に配分されるとのことであった。教科書の数については、先生の分は十分にあり、生徒分はないため黒板に書いている。教科書に関しては問題がないが、文房具の数が足りていないことが問題となっている。もう1つの問題が1年間で約20%の生徒が学校を辞めてしまうことである。退学する生徒は女子よりも男子の方が多く、テキストを購入できるかどうかという家庭状況によって退学率が上がっているのが現状である。

(2) 男子中学生15歳・女子中学生16歳（Grade 9、中学3年生）

2人にはまず学校のスケジュールを尋ねた。午前中の授業は7:00~11:00で午後の授業が

14:00~17:00 であり、月曜と火曜は午後の授業があり、水曜から土曜は午後の授業がない。また、休み時間は 15 分から 20 分である。彼らは 2 人ともモーターバイクを所持しており、それを使って学校に登校している。女子生徒は朝と休みの日に家族の手伝いでゴムの木からゴムを集める作業をしており、男子生徒は平日にリュウガンやパラミツに水やりをし、休日にはマーケットにゴムを売りに行くのが彼らの生活である。さらに細かく 1 日のスケジュールを尋ねると、女子生徒は夜の 10 時に就寝し、朝の 3 時には起床して家の手伝い（ゴムの採集）をしてから学校に行き、水曜から土曜は午後の授業がないために非公式の学校で 13:00~19:00 の間英語と・数学・物理・教養を学んでいる。男子生徒は朝の 5 時に起床し、学校へ行き、午後の授業がない水曜から土曜は家の手伝いを行っている。将来の夢を尋ねると女子生徒は空港で働くことで男子生徒は兵士になることが夢であり、どちらもコンポンチャム州の外に出て働くことを希望している。また彼らの友達にはプノンペンなどの中心地に行きたい人もいるとのことだった。さらには、インターネットを通じて他の国の様子を知ることができるため、韓国や中国、日本で働きたい人もいる。

(3) 小学校の校長（男性）

コンポンチャム州出身であるが、学校がある郡ではなく別の郡出身である。教員の数は校長が 1 人、女性教員 4 人の計 5 人である。生徒数は男子が 76 人、女子が 49 人である。校長は 2002 年から学校で個人契約として働いており、かつては試験を受けて別の学校に勤務していたが、教員が足りない上に都市から距離が離れている故に誰も教員にならない現状を見て、この地域の教員になろうと決意した。また、校長という役職については 2012 年で、それまでは教員団体の団長を務めるなどしていた。1 日のスケジュールは、まず村の上層部とミーティングをした後に学校の状況を確認し、衛生確認を行い、たまに授業を行い、その後は残った仕事を片付けたり計画を立てたりする。地方は給料が特に低く、かつては月に 4000 円ほどしかもらうことができなかった。今は月に 20000 円ほどである。また、地方では高校まで行って卒業した人がほとんどいないのが現状である。これでも地方の教員に対する周りからの待遇は改善されつつあり、校長は教員という存在が大事にされていない時代から校長として働いていたと述べた。さらに校長は校長を務めながらも大学に通い、2019 年に卒業した。他の教員も似たような経験をしているとのことだった。また、退学率が高く、年に数人が退学してしまうのが現状である。農村では貧困の家族も多く、朝 4~5 時に起きて 9 時までプランテーションで働き、その後学校に来るというスケジュールを繰り返していると、学校に行く気力がなくなったりして、登校したとしても疲れて授業中に眠ってしまい教育を受ける意味がなくなって、結果として退学することを選択することになってしまう。とはいえ、村の人々の教育に対する意識も変化しつつあり、教育を受けることの重要性を理解してくれる家庭が増えてきた。また、校長は家族に付き添って他の場所へ行く子供たちには金銭的に援助を行うことはできないが、説得をして辞めないよう伝えている。教育の現状としては、教員が不足しており、国家から教員として認められているのは 3 人で 2 人は契約の教員である。教科書の数は足りているが文房具などが足りていない。しかし、紙の品質などは 20 年前と比べるとかなり改善されたという。チョークも

昔は自分で作っていたそうだ。学校全体のスケジュールとしては、7~11時が早く起きることのできる1~3年生に授業を行い、13~17時には午前中に家の手伝いをする人が多い高学年の授業が行われている。教室の数が少なく足りていないために、午前と午後を分けて授業を行っている。

(4) Ou Prolos 村の村長 (男性)

村長の家の庭でインタビューを行った。家の中には村長の奥さんと娘らしき女性が2人に息子または娘の旦那らしき男性が1人、村長の孫らしき男の子の赤ちゃんが1人いた。入口から見える家の中は綺麗で、村長の家族は床に座ったり寝転んだりしていた。家族構成は男性が5人、女性が5人の10人家族で、村長はコンボンチャム州出身であり、この村で生まれ育った。村長になった理由は、村人からの投票で、周りの人々から信頼されている人が村長になりやすいとのことだった。1日のスケジュールは午前中から午後2時にかけて人から借りた5haのゴム畑に行き、ゴムの採集を行い、時々ある会議に参加したり、村の人々を集めて村長の家で会議を行ったりする。村長はゴム畑に人を雇っておらず、たまに子供に手伝ってもらうが、子供は全員学校へ通っている。教育の課題について尋ねると、教員が兼業可能である制度に問題があると答えた。例えば先生が学校とは別に塾を経営すると自分の塾に通う生徒には良い成績を出すようになり、良い成績が欲しいが故に塾にも通う家庭が増え、家計への負担が増える状況になっている。もう1つの問題が貧困で、子供を学校に行かせると労働力が足りない家庭が多いのが現状である。村長から見た教育の変化は、1つ目が学校の建物が木造からコンクリートになったこと。2つ目が教員の増加。しかし、教員数は依然として不足している。3つ目は、公衆衛生の改善。昔は病気になると祈祷をすることが病気を治す手段であったが、今は病院の設備が整備され、正しい治療を行うことができる。村長自身はコンボンチャム州から出たいと思ったことはなく、生活基盤が整ったこの土地に住むこと以外は選択肢になかった。また、仮に他の場所へ移住するとしたら、費用がかかるため、生活基盤があればどこにいても同じだという考えを持つ村長は今後もこの土地で暮らすとのことだった。村の人々が移住する理由としては、高額の買い物をする際の担保に土地を選択し、借金が返済できなくなって土地を没収されてしまい、土地がなくなったことが理由の1つとして挙げられた。借金返済のための出稼ぎで両親だけがこの土地を離れ、高齢者と子供だけがこの村に残るケースも少なくない。

(5) 女子中学生 16歳(Grade 7、中学1年生)

彼女はコンボンチャム州出身で、学校から5キロ離れたところに住んでおり、モーターバイクで通学している。兄2人姉1人の6人家族で、兄は2人とも結婚して別の都市へ出ており、家で一緒に暮らしているのは姉と両親の4人である。平日は学校に通い、休日は友達の家や市場に遊びに行くが、他の都市に行くことはない。また、学校が終わった後は家族に料理を作るなどの家事をしている。英語力を上げるために携帯を使って英語の歌を聴いている。また、情報を得るためにFacebookやTikTokを使うが、クメール語に翻訳できるという点で情報を得るときにはFacebookの方をより多く使う。彼女の家庭の問題として、母と兄の仲が悪いことと、彼女が勉強するためのお金を農家である父親が稼ぐことができないことが挙げられた。プライベート

ートスクールは費用がかかるが、そのお金が足りないために兄姉が代わりに払っている。将来の夢は母校の教師になることで、子供たちに知識を提供したいという思いがある。また、家が学校に近いため家族と一緒に暮らしたいという願望もあり、この村から出たいという意思もないため母校の教師になることを望んでいる。友達はプノンペンで裁判官、医者、教師、エンジニアになりたいという夢を持っている。

(6) Ktuoy 4 村の村長 (男性)



彼はコンボンチャム州出身ではあるが、違う村出身である。結婚を機にこの村へ来て、それからずっとこの村に住んでいる。娘が2人いる4人家族で、2人ともプノンペンに勉強しに行き、村に戻ってくる予定はないし、帰省も年に3回のみである。下の娘は大学2年生である。都会には仕事も学校もたくさんあり、上の娘はコンボンチャム州で結婚していて子供もいるため、学校の選択肢の多いコンボンチャム州の都市にいる。都市はプライベートスクールが多く学ぶ機会も多い上に、働く場所も多いため、お金を稼ぎながら学校に通うことができる。村長は朝から夕方までゴムの木の栽培をしていて2人の労働者を雇っている。また、彼の家の掃除やリュウガンの木に水やりをしている。村長としての仕事は、コミュニティの会議に出席したり、村の人口や出産人数などの状況把握をしたり、流行病などを村人に知らせることである。さらに、彼は村長だけではなく、村の保健支援団体、ヘルスセンターコミュニティも兼任しているため、村の衛生状況などにも細かく気を配っている。20年前と今を比べると、高校が村にできたり、道の状態が良くなったり、4年前には村に電気が通ったり、妊婦さんは毎月検診をヘルスセンターで行うようになった。また、教育に関しても両親が教育の重要性を理解し始め、先生たちも両親に対して子供に教育を受けさせるよう推奨している。彼は、これからも村人に対して情報の共有を続けていき、教育に対してより理解してもらえるようにより推奨していき、教育水準の向上と結核撲滅プログラムを行なっていきたいとしている。

(7) 出稼ぎから戻ってきた女性

彼女はコンボンチャム州出身の女性である。彼女は男5人、女6人の11人家族で、7番目の子供である。学校には8年生(中学2年生)まで通った。彼女は2017年にプノンペンの工場で6ヶ月間働き、2022年2月にはコンボンサムにある中国企業オンラインカジノでお金を集める

cashierとして働いていた。同年6月にはスキルを身につけ、お金を稼ぐために、プノンペンで毎日ネイルやヘアメイクについて学んだ。この学校への学費はコンボンソムで働いていた時に貯めておいた貯金分から出している。彼女は以前のようにコンボンソムに戻って働く気はないが、自分のネイルを売りにコンボンソムに行くことには前向きであった。彼女が抱える問題としては、兄弟が多いため、勉強するための十分な援助を受けられなかったことと、コンボンソムで働いていたときに2~3ヶ月分の給料が支払われなかったことを挙げている。さらにプノンペンでも半分しか給料が支払われなかった。これらの理由は不明であるが、家族と自分の生活費を稼ぐ必要があるのに、十分なお金が得られないという大きな問題があった。



(8) 出稼ぎから戻ってきた親子

母が45歳、娘が19歳である。家族構成は男3人女5人の8人家族で、出身はコンボンチャム州、現在の収入源はゴムの木からとれたゴムを売った利益である。母は15歳で結婚しており、学校に通ったことがないが娘は9学年（中学3年生）まで通っていた。2人の1日のスケジュールは、午前中に自分の家のゴム畑で作業をし、午後は雇われているゴム畑で作業をする。休みの日はなく、家族全員で働いている。母の出稼ぎは2016年から2022年まで、タイのガス工場息子と一緒に働いていた。出稼ぎに出たのは借金をしていたため、借金を無事に完済して3ヶ月前にコンボンチャム州に帰ってくる事ができた。出稼ぎに出ている5年間でコンボンチャム州に帰ってこられたのは1回のみである。娘の出稼ぎは2022年7月の1ヶ月間で兄弟姉妹も一緒にコンボンソムの飲食店で働いていた。昼はレストラン、夜はスカイバーの店員をしていた。出稼ぎに行った理由はコンボンソムの方が稼げるからである。彼女の将来の夢は小さなお店を家で開くことである。コンボンソムでの出稼ぎの時にコンボンチャム州以外の場所で生活することが大変であると知り、コンボンチャム州に残って家族と暮らしたいという願望がある。現在のコンボンチャム州における教育システムについては、十分であると思うが文房具などの道具が不足しているとのことだった。また、村は以前と比べて道路が整備され、タクシーも使えるようになり、家の周辺に小さなお店があるため街の中心部に行かなくても良くなったとの意見であった。

3. 考察

これらのインタビュー調査から見てきたコンボンチャムの教育の現状として教員が不足していることと、教材は十分であるが文房具などの道具はいまだに不足していること、生徒は家の手伝いをしながら学校に通っているということがわかった。また、首都プノンペンには働き口や学ぶ機会が多いことも共通認識としてあるようであった。コンボンチャム州に残りたいという考えを持つ人はコンボンチャム州に対する居心地の良さだけではなく、家族と離れたくないという気持ちが強いことも事実であった。また、教育に対しては皆前向きな意見を持っており、教員に対してもマイナスな感情を抱えている人は見受けられなかった。家庭環境によって学校に通えない子も数名見受けられるものの、教育を受けることが当たり前の環境が出来上がっていることで村人たちの教育に対する前向きな姿勢を生み出していると考えられる。また、インターネットが普及していることで誰でも外部の情報を入手することができ、自分の将来の選択肢が広がっていることから、より教育の重要性を感じているのではないかと考える。それと同時に従来よりも職業の選択肢が増えたために教員や村の警察官などの村の中の職業以外の職業に就く人が増え、村離れが進んでいることも事実として言えるのではないかと考える。さらに、コンボンチャム州を出て働きたいという人は、お金を稼ぐ上で、より稼げる場所を選んでいるためにコンボンチャム州以外の場所で働こうとしている。同じコンボンチャム州であっても生活環境はかなり異なっており、家の中が清潔に保たれている家庭もあれば物が溢れている家庭もあった。どの家庭環境においても教育は重要であるという意見は共通しており、教育を受けることを諦める人は金銭的な問題で諦める人か家庭の手伝いのためである人がほとんどであったために、いかに家計に負担をかけずに教育を受けられるようにするかが重要であると感じた。

4. 結論と感想

「なぜ農村で教員不足が起こっているのか」という問いに対する結論として、仮説として立てた、都市部の環境の良さだけではなく、インターネットの普及による農村の人々の選択肢の広がりや、都市部から農村部への流入が少ないことが挙げられる。教員の待遇に関しては、給料の面では待遇が悪いと言えるが、村人からの待遇が悪いという状況は見受けられなかった。また、農村調査を行った感想として、教科書でしか見たことのないような環境で生活をしている人たちと交流をし、彼らが普段何を感じているのか、何に苦勞しているのかを知ることができただけでなく、発展途上国と言えば苦勞が多いと思われがちで実際に私から見れば多くの苦勞をしているように感じたが、その生活の中でも楽しみや自分の考えをしっかりと持っていることにも気がつくことができた。彼らの娯楽としてTikTokがあり、私と同じようにインターネットで面白い動画を見ていることに親近感が湧いたと同時に、発展途上国とはいえ、先進国に住む私と同じものを生活に取り入れていることに気がつくことができた。また、給料の良い場所、職業に就くことだけが正解なのではなく、自分が大切にしたいと思うものを一番に考えた結果、コンボンチャム州での生活を選んでいる人がいることを実感した。自

分の知らない世界に住む人々やモノ、考え方に触れ、自分の考え方・見方が広がるとても良い経験
することができた。



農村における教員不足の原因についての調査

教養学部 20LL156 山城 星

1. はじめに

調査の目的は、カンボジア・コンポンチャム州の教育や生活の現状を明らかにするとともに、課題の一つである農村の教員不足の要因を分析することである。カンボジアでは就学率が近年上昇傾向にある一方で、農村における生徒数に対する教師が足りておらず、都市部との格差も生じている。本調査ではカンボジア・コンポンチャム州において、中学校の生徒や教師、村人らにインタビューを実施した。その調査結果により、農業従事者と比較して教員の給与が低いこと、都市部の方が高い給与を得られること、という教員の経済的側面による原因が大きいことがわかった。

(1)調査目的

調査テーマ「なぜ農村の教員は不足しているのか」

「カンボジア王国教員養成大学建設計画準備調査報告書」(2017)によると、カンボジアの都市部と地方部について、生徒数と教員数の割合を比較すると、都市部に教員が集中している。当報告書では、2014/15年の教育・青年・スポーツ省人事局データによると、プノンペンでは全ての科目で余剰教員が生じている一方で、地方部の複数の州において教員が不足しており、教員不足の科目も多岐に渡っているため、教員配置上の地域格差が大きいのが実態である。

表1 都市部と地方部の教員配置状況 (2016/17年)

		生徒数(人)	割合 (%)	教員数 (人)	割合 (%)	女性教員の割合 (%)	1教員あたり生徒数 (人)	1クラスあたり生徒数 (人)
初等教育	全体	2,022,061	100.0	46,149	100	55.7	43.8	33.0
	都市部	331,485	16.4	9,784	21.2	69.5	33.9	36.5
	地方部	1,690,576	83.6	36,365	78.8	52.0	46.5	32.4
前期 後期 中等 教育	全体	865,451	100.0	41,407	100.0	41.0	20.9	45.4
	都市部	206,826	23.9	12,565	30.3	45.0	16.5	45.2
	地方部	658,625	76.1	28,842	69.7	39.3	22.8	45.5

(出典：「カンボジア王国教員養成大学建設計画準備調査報告書」より筆者作成)

前述のデータから分かる教員不足は、教育の質に大きな影響を与えられ考えられる。教員不足が原因となり、学校の機能不全に繋がることや更なる都市部と地方部の教育格差・経済格差が広がる事が予想される。これらの理由から、「なぜ農村の教員は不足しているのか」という点を今回の調査の目的として設定した。

(2)調査の意義

教育は国家の発展に必要不可欠であると同時に、開発の現場においても様々な課題を抱えているイシューの一つである。カンボジアだけでなく、他のアジア諸国やアフリカ諸国も就学率や退学率

をはじめとした教育の問題が多く残されている。今回は、貧困等の複数の原因が複雑化されていると考えられる農村の教員不足について調査することにより、今後の教育開発や援助について捉え直す新たなきっかけになると考えられる。

(3) 仮説

農村（地方部）における教員不足の要因として、教員の待遇の悪さを仮説として設定した。特に、「農村と比較して都市部の方が教員の待遇がいいこと」「農村においては農業に従事する方が多くの収入を得られること」の2点が主な原因として考えられる。

2. 調査

(1) 調査概要

筆者らは、2022年9月3日から9月9日までの6日間にわたってカンボジアに滞在し、そのうちの2日間を使い、コンポンチャム州において様々な属性のグループ（個人）に対してインタビュー調査を行った。表1にインタビュー対象者の概要をまとめた。所要時間は1グループ（1人）につき40分～1時間である。現地に事業所の拠点がある、特定非営利活動法人ピープルズ・ホープ・ジャパン（以下、「PHJ」と呼称する）の協力により、インタビュー対象者への調査が実現した。

被調査者の使用言語はクメール語であったため、インタビューでは筆者らが英語で質問し、PHJカンボジアの現地スタッフがクメール語に翻訳して尋ねる、という形式で行った。

表2：インタビュー対象者の概要

	名前	出身	就学経験など
A 中学校	Aさん	—	あり。当校の校長。
	Bさん	—	あり。当校の教員。
	Cさん	コンポンチャム州	現在中学校9年生。
	Dさん	コンポンチャム州	現在中学校9年生。
B 小学校	Eさん	コンポンチャム州	あり。当校の校長。
C 村	Fさん	コンポンチャム州	不明。村長。農業従事。
A 中学校	Gさん	コンポンチャム州	現在中学校7年生。
D 村	Hさん	コンポンチャム州	不明。村長。保健コミュニティの活動。
E 村	Iさん	コンポンチャム州	中学校8年生まで就学。
	Jさん	コンポンチャム州	なし。農業従事。
	Kさん	コンポンチャム州	中学校9年生まで就学。

(2) 調査対象地域の概要

調査対象地域は、カンボジア・コンポンチャム州である。

カンボジアは、人口15.3百万人であり、カンボジア人（クメール人）がそのうちの約90%を占めている。面積は181,035平方キロメートルで東南アジアに位置する王国である。言語はクメール語で、一部の少数民族を除き、国民のほとんどが仏教徒である。首都プノンペンを中心に、経済面では2016年7月には低中所得国（世界銀行の分類による）入りを果たし、その後もGDP成長率は7%

前後を維持している。また、2030年までの高中所得入りが政府目標である。近年は日系企業のカンボジア進出も加速しており、南部経済回廊を中心とした、道路、港湾、税関等のハード及びソフト両面における物流網の強化、産業人材育成などソフト面の包括的支援が、こうした経済活動にも貢献している。しかしながら、都市部と地方部の格差やプノンペンにおける都市問題の深刻化といった新たな課題にも直面している。

調査対象地域のコンボンチャム州は都市部との格差が大きい地方部（農村部）の一つである。同州は国東部のメコン川流域に位置し、コメの生産を中心に、キャッサバや野菜の栽培が盛んな地域である。2004年には33.1%であったコンボンチャム州の貧困度は2012年には20.4%まで低下した。しかし、貧富の差は拡大している上に、多くの貧困層から脱した人々も農作物の不作や経済不況による影響で再び貧困層に戻ってしまう事例が多い。

なお、日本との深い関わりも特徴的である。同州にはカンボジアの国土を分断するメコン川に架かる初の橋として2001年に開通された「きずな橋」がある。この橋は日本が無償資金協力で整備した橋であり、現在カンボジアで使用されている500リエル紙幣には「きずな橋」や「つばさ橋」

（ASEAN諸国の物流の生命線である「南部経済回廊」の一部である国道1号線のメコン川に架かる橋として2015年に開通）が日章旗とともに描かれている。



図1 コンボンチャム州の地図（JICA | コンボンチャム州村落飲料水供給計画（第1期））より



図2 「きずな橋」や「つばさ橋」が日章旗とともに描かれたカンボジアの500リエル紙幣（外務省 | ODA | カンボジア和平から経済成長への息の長い協力 現地の技術者と共に課題に取り組む）より



図3 メコン川に架かる初の橋となった「きずな橋」（JICA | メコン川架橋建設計画）より

(3)調査内容

インタビュー内容は、就学者に対しては主に、①学校でのスケジュール、②将来どこで働きたいか、③どんな職業に就きたいか、を中心に尋ねた。教員や農業従事者に対しては主に、①1日の生活スケジュール、②なぜプノンペンなどの都市ではなくコンポンチャムにいるのか、③村から離れるのはどんな人か、の3点を中心に尋ねた。

また、全員に共通する質問として、①1日の生活スケジュール、②生活（学校）で困っていること、③出身地の3点についてもインタビューを行った。そのほかにも、家族構成や趣味、この村の今

後の展望、教育についてどのように考えているか等、アイスブレイクを兼ねながら、インタビュー対象者にあらゆることを伺った。

(4)調査結果と考察

調査結果は全てのインタビュー内容を記すのではなく、「なぜ農村の教員は不足しているのか」という問いに対して、筆者が要因だと考えたことのみ記載する。

①将来の夢について

A 中学校の学生である C さん、D さん、G さん、出稼ぎから帰ってきた 19 歳の K さんに「将来どこで働きたいか」「どんな職業に就きたいか」について質問したところ、以下の回答が得られた。

C さん「できれば都市部に出たい」「空港で働くことが夢」

D さん「兵士になりたい」

G さん「コンポンチャムで教師になることが夢」「歴史を教えたい」「知識を子どもたちに提供したい」「家族と一緒にいたいからこの村から出たくない」

K さん「自分の家で自分のお店をやりたい」「コンポンチャムに残って家族と暮らしたい」



図 4(左) A 中学校の生徒らが下校時にバイクに乗っている様子



図 5(右) A 中学校の敷地内にある校庭のベンチ

②教育の抱える問題について

B 小学校の校長先生である E さんに、コンポンチャム州の教育の現状について語ってもらった。

E さん

「試験を受けて別の地域で働いていたが、教員が足りない、遠い故に誰も教員になりたがらない現状を見てこの地域の教員になろうと決意した」

「地方は給与が特に低く、月 4000 円くらい」

「高校まで行って卒業した人がほとんどいない」

また、B 小学校に伺った際に校内に売店が構えられていた。現地のガイドによると教員らが休憩時間に生徒に対して商売をしているのだという。副業が許可されているという点、教員がわざわざ副業をしようとする点からも分かるように、教員の給与は低いことが考えられる。

①と②より、教員の給与が低いという現状と、その現状を知った生徒らが教員になりたがらない傾向にあるということがわかった。そのため、教員不足は教員の待遇の悪さが一つの要因であると考えられる。

3. 終わりに

(1)調査を終えての感想

農村調査を実施した中で、想像もしていなかった出来事が多々起き、非常に有意義な時間となった。移動の車に乗りながら凹凸の激しい道に揺られたり、インタビューをしている際、顔に虫が集まってきたり、水汲み式のトイレを使用したり、発見と驚きの連続だった。また、インタビュー調査をするには、様々な方々のご協力が不可欠であることを身にしみて感じた。インタビューに協力して下さった農村の住民の方々、アポイントメントや移動の手配などをして下さった PHJ スタッフの方々、同行・引率して下さった現地ガイド・運転手・添乗員・担当の先生等、様々な方々のご尽力のおかげで、無事調査を終えることができた。関わって下さった方々への感謝の気持ちを忘れず、今回の調査の経験を今後活かしていきたい。

(2)今後の展望

今回の調査では筆者らが翻訳者を介してインタビューを行ったため、誤訳をしまったり、尋ねたいことがうまく伝わっていなかったりした可能性が大いにある。そのため、その点に留意しておく必要がある。また、今後の展望として今回の調査に加えて量的研究を組み合わせることで、さらに解像度の高い分析ができるのではないかと考えられる。

〈参考 web サイト (すべて 2020/09/15 にアクセス)〉

- ・ 2017, JICA, 「カンボジア王国教員養成大学建設計画準備調査報告書」

https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/12301925_01.pdf

- ・ THE WORLD BANK | 教育に関するデータ

<https://www.worldbank.org/ja/news/feature/2014/03/28/open-data-education>

- ・ 外務省 | カンボジア王国基礎データ

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/data.html>

- ・ JICA | 各国における取り組み | カンボジア

<https://www.jica.go.jp/cambodia/index.html>

- ・ JICA | コンポンチャム州村落飲料水供給計画 (第 1 期)

<https://www.jica.go.jp/oda/project/0603400/index.html>

- ・ 外務省 | ODA | コンポンチャム州における貧困削減を目指した持続可能な農業生産基盤の普及事業 (第 2 年次)

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/000501913.pdf>

- ・ 外務省 | ODA | カンボジア和平から経済成長への息の長い協力 現地の技術者と共に課題に取り組む

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/bn_409.html

- ・ JICA | メコン川架橋建設計画

<https://www.jica.go.jp/oda/project/9700100/index.html>

カンボジアの農村における教育の在り方

教養学部 20LL192 武藤 清佳

1. はじめに

私たちが暮らす日本では、ほとんどの人々が高校卒業まで学校に通うことが当たり前であり、現在では大学進学を志す人々も多くなってきている。その一方、カンボジアでは、中学校進学はおろか、その先の高校進学、大学進学する人の割合は少ない。調査に向かう前に調べたカンボジアの就学率は、初等教育に関して 100%を超えるものの、中等教育に関してはその半分の 55%であるということがわかった。また途上国において就学率が低くなる要因は、事前に読んだ資料によると、貧困が理由となり教育にお金をかけられないことや健康状態が悪く学校に通いたくても通えないこと、学校での教材や教室が不足していること、親が十分な教育を受けていないため教育の重要さがわからず、子どもを学校に通わせるより家の手伝いを優先すること、教師として働く多くの人々が、しっかりと学校教育を受けないまま教師になっていることなど様々なことが挙げられていた。

しかし、実際にカンボジアの農村で暮らす人々にインタビューしたところ、確かに資料と一致する情報もあれば、まったく正反対の情報も得られた。本レポートでは、就学率が低い要因はどこにあるのか、また、農村で暮らす人々にとって学校教育は役に立つのか、という視点を軸に論じていきたい。

2. 農村における調査

今回の調査は、OML Junior High School、Ou Prolos Primary School、Ou Prolos Village、Ktouy 4 Village にて、各学校の先生方と 6 つの家庭に協力していただいた。

まず、中学校では、校長先生ともうひとりの教員に話を伺った。この中学校の生徒数は 188 人で、その内女子生徒は 110 人である。それに対し、教師の人数は 6 人である。教材の数は足りているが、文房具の数は足りておらず、中学校のある場所が都市から離れていることから、支給が追いついていないという。生徒の中には、中退する生徒も少なくはなく、男子生徒の中には出稼ぎのために学校を休む生徒が多く、中退率も高い。教員に関して、カンボジアの中学校では、日本の中学校と異なり、一人の教員が教えている教科は歴史、地球学、科学、物理というように様々な教科を教えている。先生方は今後の挑戦として、生徒の退学を止め、新しい校舎を建てたいとおっしゃっていた。

次に、小学校では、校長先生に話を伺った。この小学校の生徒数は 125 人で、その内女子生徒は 49 人、教師は 5 人で、校長先生以外の 4 人の先生たちは女性とのことだった。生徒たちは、午前と午後にかけて授業が行われ、午前中には低学年の生徒、午後には高学年の生徒の授業がある。高学年の生徒は、家の手伝いをしてから学校に登校する。昔は、教室が足りないことから 1 ヶ月交代で授業が行われたため、授業時間の間違いもあった。中学校と同様に、小学校でも教科書の数は十分だが、文房



図 1 小学校にて校長先生へのインタビュー

具は不足している。昔は、テキストもなく、ノートもダンボールみたいな色をしており、あるだけましという感覚だったという。チョークもなかったため、粘土からチョークを作り、植物を使って色付けを行っていた。それに比べ、現在では教育省からのテキストの配布がされるようになった。生徒たちが学校に通う上で一番の困難となっていることは、親の手伝いをするのである。親の仕事の手伝いをするために、朝4時に起き、9時まで手伝いをし、そこから学校に通うことになる。日常的にそれが行われること

が子どもたちの負担になり、成績不振に陥り、さらに勉強をしなくなるという悪循環を生むことになっているのだ。また、親の引っ越しに伴い、中退することが多い。しかし、教員が生徒の中退を止めようとするため、中退率は1年に数人程度とそれほど高くない。生徒たちは、一日に2、3科目勉強し、その中でも数学や国語は重点的に時間を割いて勉強している。小学校の校長先生は、意欲的に教育を変えたいという思いを持っていて、元々住んでいたのは都市だったが、今の小学校がある地域が貧しく、そこで教員になる決心をした。彼は元々契約教員であったが、資格を取って正式な教員になったのである。

以下の調査結果は各家庭に関する調査結果である。

まず、1軒目は、25歳男性ソペアさんと23歳女性チェンリーさんの家庭である。子どもは3歳と1歳である。彼らは雇われ仕事でゴムプランテーションにて働いている。ソペアさんは grade 4 (小学4年) までで、チェンリーさんは grade 5 (小学5年) までしか教育を受けていない。彼らはもっと勉強したかったが、家が貧しくて学校に通うことを諦めざるをえなかった。彼らの家から学校までの距離は1キロだった。そのため、学校に良い思い出はなく、教育に関して自身の友人たちと話すこともない。読み書きについては、読むことはできるが、書くことはできない。彼らの両親は、彼らに学校で学ばせたいという思いはあったものの、それを実現することは難しかった。その分、彼らは、自分たちの子どもには大学卒業するまで教育を受けさせたいと思っていると話した。将来、先生や金融関係の仕事に就いてほしいと思っ



図 2 ソペアさん一家と記念撮影

ているが、あまり職業に関することはわからないようであった。カンボジアの他の地域と同じように、この地域でも自分の家庭が政府に貧困層世帯としてみとめられ、貧困世帯証明書が与えられる場合、政府から援助が受けられるシステムがある。しかし、ソペアさんとチェンリーさんの家庭は、証明書の申請が間に合わず援助が受けられていない状態である。近内将来、再度申請をする予定があると話した。また、ソペアさんとチェンリーさんの隣人の家庭にも少し話を聞くことができた。そこで暮らしている16歳の子どもは、学校に通えていなかったが、先生たちの説得により学校に行くようになった。子どもたちの中には、引っ越しで学校を転々とし、勉強についていけなくなり、留年してしまうことで、恥ずかしい思いをして学校をやめてしまう子どももいる。

2軒目は、33歳女性ニ・スレイモンさんの家庭である。13歳、9歳、7歳の3人の子どもを持ち、彼女はゴムプランテーションで仕事を行っている。彼女は grade6 (小学6年) までしか教育を受けていない。彼女は、自分が長女であったことから家の農業を手伝わなければならない、学校に行くことを断念した。学校で学ぶことは楽しく、中でも、学校で身に付けたリーディングや数字を扱う基礎知識は現在の生活に役立っている。また、友人とも授業に関して話すこともある。ニ・スレイモンさんの家から学校までの距離は1キロで遠くはなかった。彼女の両親は、クメールルージュ時代に生まれ、父親は grade7 (中学1年) まで教育を受けたが、母親は学校に通えなかった。彼女は、自分の子どもたちを学校に通わせ続けたいと考え、家事を手伝わせるよりも学校に通わせることを優先しているという。3人の子どもの内、2人は現在学校に通っているが1人は病気のため学校に通えていない。来年、学校に行くかもしれないと話した。現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、スマートフォンを使い zoom で授業を受けている。しかし、インターネット環境があまり良くないようであった。学校に通っていた頃、彼女は子どもたちに朝食代で3000リエル (約0.75ドル)、昼食代で2000リエル (約0.5ドル) 渡していた。

3軒目は、27歳女性スレニアンさんの家庭である。5歳の子どもを1人持つ。彼女は grade3 (小学3年) で、彼女の夫は grade2 (小学2年) までしか教育を受けていない状態である。彼女らの家は、



図3 ゴムプランテーションの中にあるスレニアンさんの家

ゴムの木々で囲まれており、2人ともゴムプランテーションで仕事をしている。彼女は、貧困が理由で学校に通えなかったが、もっと勉強をして大学まで行きたかった。学校で使うテキストは先生からもらった。学校を辞めてからもクメール語は学び続けている。学校はかなり遠くにあったため、バイクを使って通っていたが、負担ではなく楽しかったと話した。子どもには、高校まで学校に通わせたいと考えており、同じ村の人たちと子どもを学校に行かせるために色々相談をしているようである。彼女は、肺の病気を抱えており、よく病院に通っていると話した。仕事のために、朝4時に起きなければならないが、病気の影響でよく眠れず、すぐに疲れがたまる

てしまうと話した。

4 軒目は、21 歳女性ナディさんの家庭である。1 歳 8 ヶ月の子どもがいる。彼女は grade 6（小学 6 年）で、23 歳の夫は grade 7（中学 1 年）まで教育を受けた。2 人ともゴムプランテーションで仕事をしている。ナディさんは、数学、クメール語、語学を学校で学び、読み書きや数字をかぞえることは少しできる。学校に通うことが好きであり、学校での友人と今でも交流があり、パーティーを開くこともある。彼女の両親は彼女を学校に行かせたが、彼女は仕事で忙しくしている両親を手伝うために学校を辞めた。彼女自身、外国についてたくさん学びたいという思いや、将来ナースになりたい願いを抱いていた。自分が実現できなかった分、子どもを学校に通わせ、外国のことに学んでもらったり、医療従事者や警察官になったりして欲しいと語った。

5 軒目は、35 歳女性パンタインさんの家庭である。彼女は、grade 9（中学 3 年）の 16 歳、grade 5（小学 5 年）の 12 歳、grade 4（小学 4 年）の 10 歳、計 3 人の子どもを持ち、彼女自身は grade 7（中学 1 年）の途中である。彼女はグロサリーストアを経営している。彼女は、学校に行ったり行かなかったりすることがあったが、年上の友達と遊んだり、クッキーを作ったりと学校生活を楽しんでいた。クメール語を学ぶのが楽しく、それを理解できるようになるのも良かったと話した。読み書きはけっこうできる。貧困が理由で学校に通えなくなってしまったが、学校で使うテキストや文房具は十分だった。子どもたちには、良い職業に就かせたいが、具体的な職業は子どもたちに決めてもらいたいとも話した。彼女は子どもたちにお小遣いを与えており、一番上の子どもには 8000 リエル（約 2 ドル）、2 番目の子どもには 2000 リエル（約 0.5 ドル）、3 番目の子どもには 1500 リエル（約 0.3 ドル）与えている。負担ではないが、時々厳しいと感じることもあり、子どもに何かを作ってあげる日もある。

6 軒目は、41 歳男性カムシンヌーンさんと 35 歳女性ハンソチーアさんの家庭である。彼らには 3 人の子どもがおり、上から 18 歳、14 歳、5 歳である。18 歳の子どもは grade 4（小学 4 年）で学校を中退し、14 歳の子どもは grade 5（小学 5 年）で学校に通い続けており、5 歳の子どもはフリースクールに通っている。カムシンヌーンさんは grade 8（中学 2 年）で、ハンソチーアさんは grade 1（小学 1 年）までしか教育を受けていない。彼女は両親が離婚してしまったため、学校に通えなかった。彼らはゴムプランテーションで仕事をし、18 歳の子どもも手伝っている。彼は出稼ぎに出かけながら学校に通っていた。子どもには、近くに高校があるということもあり、高校までは行かせ続けたいと思っている。しかし、子どもの学費のために、ローンをしているため、最後までサポートすることが難しいとも話した。2 番目の子どもである息子は、食用のネズミを罠にかけて捕まえようとした際、その罠が目にあたり、片目が見えなくなってしまった。それをきっかけに息子は将来医療従事者になりたいと語っているという。カムシンヌーンさんは学士まで勉強させたいと話したが、彼自身はそれがどんなものか分からなかった。子どもたちは新型コロナウイルス感染拡大の影響で学校に通えず、Zoom も使えなかったため一時的に勉強ができない期間があったが、現在は学校に通えている。

3. インタビュー調査を基にした考察

インタビューで得られた情報に基づくと、就学率が低くなっている要因には貧困であるこ

とが大きく影響していると考えられる。しかし、貧困であったとしても現地の状況改善に努めれば就学率の上昇が可能になるのではないだろうか。

そのように考えられる理由として、まず、教員が教育に対して前向きな気持ちを持っていることが挙げられる。事前資料では、学校の教材、教室不足、教員のレベルが低いという情報が得られた。それと今回のインタビューで得られた情報を比較すると、学校における教材の不足はなく、教員自身も資格を取って教員になる人々が増えてきている。

また、教員は勉強についていけず学校に行けなくなってしまった生徒にも学校に来るよう促したり、学校時間外に読み書きを教えたりもしている。カンボジアに行く前に思い描いていた教師の形とは異なり、教育熱心な教員が増えてきているのではないだろうか。そのような教員たちが今後ロールモデルとなっていけば、子どもたちがより意欲的に学習に取り組むようになり、就学率の改善につながると考える。将来的にも教員の役割はより大きくなるだろう。

また、今回のインタビューにおいて、家庭ごとに具体性は異なるが、全ての家庭が子どもたちに学校に通わせたいと思っていることがわかった。しかし、同時に貧困に苦しむ家庭も多く見られ、実際にインタビューを行った親たちは、貧困や家の手伝いを理由に学校に通えなかったり、満足に勉強できなかったりする人が多かった。彼らは勉強する機会が限られてしまっており、彼らに限らず、子どもたちにも将来そのようなことがないと言い切れない。そのため、学校に通っている時間帯以外の時間を使って、いわゆる家庭学習を行うというように勉強時間を確保する必要があると考える。ただし、その前に多少のインフラ整備を行うことも重要となってくる。村を訪れた際、彼らの家には机、椅子はあったが、電気、ガス、水道といったインフラは整っていないように感じた。仮に、インフラが普及し、各家庭に手元を照らせるぐらいの照明があれば、日が落ちてからも勉強時間を確保することができる。そうすれば子どもたちは勉強の遅れを取り戻せたり、復習を兼ねた自主学习に励んだりすることが可能になり、勉強についていけなくなってしまい自分より年齢が下の子どもたちと一緒に勉強することが恥であると考えため中退してしまうというような問題の解決につながり、就学率にも良い影響を与えると考えられる。しかし、しっかりと電気を使えるようにするには、かなりのコストや時間を要するため、普及させるとなると難しい課題となり得るだろう。

さらに、学校に通うことで読み書きを覚え、クメール語や数学を学べるということから、日常生活にプラスな影響を与えられていることもわかった。一方で、人々の暮らしを支える職業という点では、農村で暮らす人々はゴムプランテーションで仕事をしている人がほとんどであり、学校で学んだ知識がその場で活かされているかといった点ではそうではないように思えた。しかし、学校で何かを学ぶことが無駄になるとは考えにくい。就学率が上昇し、多くの人がもっと学びたい、知識を得たいとい



図 4 インタビューの様子

う気持ちを持って学校で学ぶようになれば、職業選択の幅が広がり、例えば現地で育てているものを活かした新たな事業の確立につながる可能性もある。それに加え、学校で身に付けたことを活かして都市部で暮らしたいと思う若者が増加していくだろう。しかし、都市部への人口流出により、都市部は発展していき、その一方で農村地域は過疎化が進み、地域による格差が広がる可能性や農村自体でも知識の差が生まれてしまい、結果として学歴社会が確立されてしまう恐れが考えられる。格差が生じてしまうとしても農村での教育を進めるべきなのか。これは悩ましい問題となるだろう。

4. おわりに

今回の調査から、就学率に関して具体的な数値が出せるわけではないが、カンボジアが必ずしも事前に調べた、いわゆる途上国における就学率の低さの要因を抱えているわけではなく、就学率の低さには主に貧困であることが影響しているものの、親や教員が抱く教育に対する思いは前向きであったり、教育をうける環境も昔と比べて改善されつつあったりすることがわかった。まだまだ、より多くの子どもたちが教育を受けられるようになるためには、解決しなければならない問題がたくさんあるが、今後就学率は上昇していくことを期待できるようなにも感じた。

自分自身にとって、今回のカンボジア農村訪問では、普段授業読んだ文献の内容を自分の目で見て実体験することができ、とても良い経験をすることができた。それと同時に、現地へ赴き、実際に聞いてみないとわからないことや写真からは伝わらない人々の暮らしの様子を見ることができ、そこからたくさんの学びをえられた。今回の調査は教育をテーマに行ったが、学校や家庭を訪れた際にゴミが回収されておらずそのまま積み重なっていたり、道路が舗装されておらず雨が降った際にはアクセスがとても悪くなったりと、教育以外のテーマでも様々な問題や改善がみられたので、違う視点や立場から長期的にアプローチしていくことも重要となってくるのではないだろうか。



図 5 村の子どもたちとの写真

参考文献

- ・ 黒崎卓・栗田匡相, 2016, 「教育と健康 人づくりは国づくり」, 『ストーリーで学ぶ開発経済学

—途上国の暮らしを考える』, 有斐閣ストゥディア, 51-68 頁.

- ・ THE WORLD BANK, 「教育に関するデータ 就学率」
<https://www.worldbank.org/ja/news/feature/2014/03/28/open-data-education>.

(2022 年 9 月 23 日閲覧)

教育の実態と就学率上昇への課題

教育学部 20PP089 木村 有紗

はじめに

私はこれまで海外に行ったことが1度もない。そんな私がテレビや学校の授業などから抱いたカンボジアに対するイメージは、多くの子どもは学校に通えず幼い頃から家の手伝いや仕事をする、貧困な家庭ばかり、国土のほとんどは農村...といったものだった。しかし、事前授業でカンボジアについて学んだ際、カンボジアにおける就学率は年々上昇しており2017年時点のデータで初等教育の就学率は95%で、学校に通うことが当たり前になっていることが分かった。ここで、私のカンボジアに対するイメージは崩された。

しかし、一方で中等教育の就学率は初等教育に比べるとまだまだ低かった(2017年で45%)。なぜ、中等教育は初等教育に比べて就学率が伸び悩んでいるのだろうか。きっと、私が以前知った情報とは大きく異なっているのであろう。現在のカンボジアにおける教育の実態とはどのようなものであるのだろうか。ここに就学率の低さの要因につながるヒントもあると思われる。ゆえに今回は「カンボジアにおける現在の教育の実態とは」という問いに着目して調査を進めることにした。

調査結果

今回は2022年9月5日と6日の2日間かけて6つの農村家庭(コンボンチャム州のOu Prolos Village と Ktouy 4 Village にて)、小学校(Ou Prolos Primary school)、中学校(OML Junior High school)にインタビューを行った。以下に詳細を記す。

(1) ソペアさん(男)

彼は25歳である。小学4年生まで学校に通っていた。学校は楽しく、特に不満もなかったが家が貧しかったため途中で通えなくなってしまった。現在はゴム栽培の仕事をしている。家族は、奥さんのチェンリーさん(23)と3人の子ども(1歳、3ヶ月、3歳5か月)がいる。

家庭が経済的に厳しい場合に政府から援助を受けられるカードがあるのだが、ソペアさんは申し込み期限に間に合わずカードを受け取ることができなかった。



写真1 ソペアさんとご家族

近所ではカードをもらっている家庭は多いそうだ。

子どもは学校に通わせたいと考えているが、通うのにかかるお金、特にお小遣いが負担だそうだ。学校には給食がないため、子どもたちはお小遣いで食べ物（朝食や昼食、クッキーなどのお菓子類）を買う。

また、ソペアさんには16歳の弟がいるのだが、コロナの影響で学校に通えなくなってしまった。しかし、「学校には行った方が良い」という教師の説得でまた行けるようになったという。ソペアさん家族は農村で最初にインタビューした家庭だったのでとても緊張した。

(2) ニ・スレイモンさん（女）

彼女は33歳である。小学6年生まで学校に通っていた。彼女の親は学校に行かせたくなかったそうだが、彼女の意志を尊重した。学校では友達を作り、勉強を楽しんだ。できれば中学校、高校まで通いたかったが長女であり家事をしなければならず断念した。学校で学んだ知識は読むことやお金を数えることなどに今も活かしているという。



写真2 スレイモンさん（中央右）

現在はゴム栽培の仕事をしており、3人の

子ども（13歳、9歳、7歳）がいる。一番下の子は病気だが、残り2人は学校に通っている。学校は家から1kmとそれほど遠くない。子どもたちには学校がある日に朝食代として3000リエル、昼食代として2000リエル、合わせて5000リエル渡している。彼女は子どもたちに対して学校に行かせるべきだという思いを強く持っているため、特に家の手伝いなどはさせていない。

また、コロナ下ではZoomを用いて授業に参加していた。しかし、ネット環境が良くないためスマホから接続するのが大変だったそうだ。終始静かにインタビューは進んだが、子どもの教育に関する質問に対しては力強く受け答えしてくれた印象だ。

(3) スレイ・ミーアンさん（女）

彼女は27歳である。小学校3年生まで学校に通っていた。学校は5~7km離れたところにあり、自転車で通っていた。好きだった教科はクメール語でもっと勉強したかったという。現在はゴム栽培の仕事をしている。家族は、夫と5歳の子どもだ。子どもは学校に行かせたいと考えていて、現在フリースクールを検討中だ。（フリースクールとは公立学校では足りない部分を補うために通う無



写真3 ミーアンさんと5歳の娘

料の学校のこと。日本では学校の勉強についていけない場合、親が勉強を教えることもあるだろうがカンボジアの農村では識字率が低くそれが叶わない。そんな親の代わりに勉強を教えてくれるのがフリースクールである。) 子どもの教育について他の人と話すこともあるという。

彼女の家にはハンモックがあったのでご厚意で座らせてもらった。さらに印象深かったのは壁に数字が書いてあったことである。(足し算の計算式もあった) なぜ書いてあるのか聞いたが返答の英語が理解できなかつたため真相は謎のままだ。

(4) ナリーさん (女)

彼女は21歳である。小学校3年生まで学校に通っていた。学校は好きで、教科では特に算数やクメール語の授業が好きだったようだ。読み書きは今でも少しできる。学校でできた友だちとは今でも連絡を取り合っているらしい。親は彼女に学校に通い続けて欲しかったそうだが、彼女が親をかわいそうだと思ひ(なぜそう思ったのかまでは聞き取れなかつたが、おそらく彼女を学校に行かせるために家事や金銭的負担をすることだと思われる) 行くのを辞めた。



家族は、夫のソカートさん(23)と1歳8か月の子どもだ。子どもは時期が来れば学校に行かせたいと

考えており、将来はナリーさん自身がなりたかつた **写真4 ナリーさん(中央)**

医者や警察官になってほしいと思っている。教育について村の他の人たちと話すこともあるという。例えば、彼女の友人の1人は医療分野を学ぶため留学を考えているようだ。

彼女とは同世代だったこともあり話がはずんだ。バナナを食べさせてくれたり、彼女の携帯で写真を撮ったりと終始和やかな雰囲気ですべてのインタビューが進んだ。一方で、自分と年が近い女性がすでに結婚していたり子どもがいたりしたことに関しては少し複雑な気持ちを抱いた。



(5) バンさん (女)

彼女は35歳である。中学1年生の途中まで学校に通っていた。決して裕福な家庭ではなかつたが、彼女の祖母が学校には行くべきという考えの人だったため行かせてもらえたようだ。学校へは行ったり行かなかつたりしたが、友だちと遊んだり、クッキーを作ったり思い出はたくさんあるようだ。特に好きだった教科はクメール語である。読み書きは今でも

写真5 バンさん

きる。

現在は食料品店を経営している。子どもが3人（17歳、16歳、10歳）いて、全員学校へ通っている。子どもには学校がある日にお小遣いを渡している。（17歳→5000リエル、16歳→2000リエル、10歳→1500リエル）子どもたちはそのお金でご飯や飲み物を買う。お小遣いを渡すことが時々大変に感じることもあるそうだ。また、バンさんは彼らを大学まで行かせたいと思っているが近くに学校が無いのが困りごとである。そして将来は彼らが就きたいと思う仕事に就いてほしいという。教育について村の他の人たちと話すことがあり、内容の多くがさまざまな職業の話だそうだ。

(6) カム シーンヌーンさん（男）

彼は41歳である。フリースクールに通って読み書きを学んだ。当時は学校に行きながら出稼ぎもしていた。

現在はゴム栽培の仕事をしており、家族は奥さんのハム ソチャーヤさん(35)と3人の子ども（18歳、14歳、5歳）がいる。子どもを学校に行かせることはそんなに大変ではないが、まだ家のローンが残っているそうだ。

コロナの影響で、子どもたちは学校に通えなくなってしまった。Zoomでも参加できなかったそうだ。現在はまた通えるようになっている。子どもには大学まで勉強させたいと考えていて、将来は医療関係の仕事に就いてほしいそうだ。



写真 6 （左から）ハム ソチャーヤさん、カム シーンヌーンさん

(7) 小学校

125人の子どもが学び、5人の先生がいる。先生たちはとても忙しくオーバーワーク気味だ。教員としての仕事は、かつては低給料で評価をされなかったものの、その状況はいくらか改善されたそうだ。もう一つ、変化として多くの人々が教育に関心を持つようになっており、校長先生が良い例だった。彼は教育熱心な方で学び直して大学を卒業した後、先生になる場所として厳しい地区を選んだそうだ。そしてドロップアウトしそうな子どもには自ら声を掛け説得するなど、子どもがなるべく長く学校に通うことができるように尽力



写真 7 Ou Prolos Primary school

している。

とはいえ学校は今もさまざまな問題を抱えている。まず、教科書は足りているが文房具などの material が足りておらず、資金不足でもある。さらには教室や先生が足りないため授業は低学年が午前、高学年が午後というように分けて行わざるを得ない状況だ。また、高学年の子どもほど家事や仕事で学校に通えなくなる。

(8) 中学校

188 人の生徒が学び、6 人の先生がいる。特徴的だったのが女子の生徒数が男子に比べかなり多かったことである。理由として、男子は仕事をするためだそう。家事や出稼ぎなどさまざまである。そして小学校と同様に教科書は足りているがそれ以外の設備が不足している。また、外の掲示板には「貧困から抜け出すために勉強しよう」という意味のことわざが書いてあった。(写真9参照) 学校と



写真 8 OML Junior High school と先生方

しても貧困と教育との関係を強く意識していること、そしてそれを生徒たちにも意識させざるを得ない状況が衝撃的だった。

考察

今回の調査での共通点は、自身は途中で学校を辞めざるを得なかったものの、どの家庭も教育を重要視しており子どもを学校に行かせたいと考えていることである。しかもただ行かせるのではなく、なるべく長く、大学まで通ってほしいと考える人もいた。また、学校には教育熱心な先生がいたり、子どもへ勉強の必要性を訴える掲示がしてあったりした。このことから、子どもに対する大人（親や先生）の教育に対する意識は高いことが分かる。しかし、現実と



写真 9 中学校にあったことわざの掲示板

して子どもは家事の手伝いや出稼ぎに行かなくてはならず、学校の質も低い（先生や教室、文房具の不足）。お金がないことが問題である。したがって中等教育の就学率を上昇させるにはまず、家庭や学校への金銭的な支援が不可欠だろう。支援の例として、1 人目にインタビューしたソペ

アさんが受けられなかった政府からの援助が挙げられる。人々はこういった支援の機会を逃さないことがまずは重要になってくる。また、学校についてはフリースクールが教育の質を補う役割として適任ではないだろうか。実際、公立学校では授業数が少ないため、フリースクールに通って残りを学んでいる子どももいる。しかし、フリースクールの運営は基本的に経営者の給料や支援者による寄付で賄われるため、経営が不安定なところも多い。ここでもやはりお金が問題になる。カンボジアは現在進行形で発展を遂げている国であり、農村部までその発展が及ぶのにはまだまだ時間がかかるのであろう。

ところで、カンボジアでの教育状況を日本と比較すると、教育熱心な家族や先生がいることや教員が不足していることなどは大体同じである。違う国でも共通点があるのは面白い。しかし、日本とカンボジアで大きく異なるのはやはり金銭的な豊かさだろう。言うまでもなく、日本の方が教育への支援が充実している。国の支援はもちろん、給食という制度のおかげでご飯が安価で食べられたり、民間の学校も NPO 法人などある程度規模の大きい企業が運営していたりするイメージだ。

最後に感想だが、農村でインタビューした家庭でスマートフォンを使っている人が多かったことに驚いた。日本でスマートフォンが当たり前に使われているのと同じように、カンボジアに住む人たちも、連絡手段や情報入手のために携帯は必要不可欠だ。カンボジアが着実に発展を遂げていることを身近に感じた瞬間だった。

参考資料

- ・ [GLOBE JUNGLE フリースクールってなに？]

<https://glojun.com/project/free-school/>

- ・ [unicef 世界子供白書 2017 教育指標 就学率（初等教育、中等教育）]

<https://www.unicef.or.jp/sowc/2017/pdf/05.pdf>

カンボジア農村部の教育の現状と求められる支援の在り方とは

教育学部 20PP131 菊地 優菜

1. はじめに

現在のカンボジアは、30年近く続いた内戦が終わり、経済発展を遂げる一方で、都市部と農村部の経済格差が広がっている。1975年から1979年までの約4年間、ポル・ポト政権によって伝統的な社会組織や制度などが廃止され、学校教育も行われなかった歴史がある。そのため、ポル・ポト政権崩壊後は、教員や教科書、学校が極端に不足し、現在もカンボジアの教育は厳しい状況にある。Knoemaのワールドデータによると、2015年のカンボジアにおける初等教育の純就学率は94.9%と改善しているように見えるが、ドロップアウト率は53.1%である。

21世紀の現在、「人間の安全保障」という考えが登場したように、カンボジアの人々の尊厳ある暮らしの実現を目的に、カンボジアの高いドロップアウト率の背景を探るとともに、農村部の人々の教育の充実の為にはどのような支援が必要なのかをインタビュー調査の分析を基に考えていきたい。

2. 農村でのインタビュー調査

カンボジア農村調査は、コンポンチャム州のある村で、9/5~9/6の二日間実施した。インタビューは、小学校の校長、中学校の校長と教師、寺院学校の3人の副校長、寺院教育を受ける一般生徒と僧侶、4つの家族を対象とした。

2022年9月5日 コンポンチャムでの調査1日目。

初めに、午前に中学校の校長と教師にインタビューをした。この中学校の生徒数は188人であり、そのうち110人が女子生徒である。188人の生徒がいる大きな中学校だが、教師数はたったの6人である。この数字は、調査した中学校の教師1人当たりの生徒数は31.33人であることを示しており、日本の中学校の教師1人当たりの生徒数が12.28人であることを踏まえると、教育予算が十分に行き届いていないことが分かる。校長も、基本的に教育省からの予算は十分ではないと述べていた。また、中学校が市外地にあるため、文房具の供給が不足している。一見整備されているように見える机や椅子は、募金によって用意されており、アジア開発銀行からの支援も受けているという。

そして、序論でも記述したように、カンボジアはドロップアウト率が非常に高いが、この中学校も毎年約20%の生徒がドロップアウトしてしまう現状がある。ドロップアウトをしてしまう生徒は女子よりも男子の方が多く、背景には、男子の方が建設業や出稼ぎを任されやすいことがある。校長と教師は、年々ドロップアウトする生徒が増えていることに、心を痛めている様子だった。校長らは、ドロップアウトを大きな教育の課題として認識しつつ、少ない教育予算の中で多忙な日々を過ごしているように感じた。

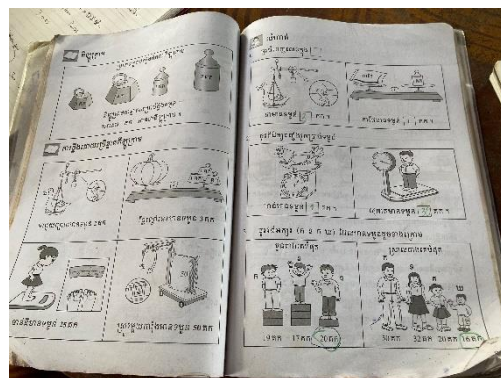
午後には、小学校の校長にインタビューをした。この小学校の児童数は125人であり、そのうち49人が女子児童である。教師数は5人であるため、この小学校の教師1人当たりの児童数は25人である。日本における小学校の教師1人当たりの児童数は15.66人であるため、中学校だけでなく小学校においても教師1人当たりの児童数が多いことが分かった。小学校の校長も、教育省からの予算が足りていないことを嘆いており、学校の設備の多くを外部からの支援に頼っていて、教員が自費で設備を補填することもあると教えてくれた。また、この小学校も中学校と同様に、教科書は足りているが、文房具等の教材が足りていない。

この小学校におけるドロップアウト率については、以前と比べるとドロップアウト率が非常に低くなったが、卒業生のうち高校まで修了する人は滅多にいないのが現状である。そして、校長にお話を伺うなかで、田舎で教育が十分に行われていない村のために、自ら働くことを志願した校長の人柄を知った。この小学校が以前に比べてドロップアウト率が低くなった背景には、ひとえにドロップアウトする子ども達を根気強く説得している校長の努力があった。

調査1日目は、2つの家族にもインタビューを行った。

1軒目で話を伺ったのは、58歳の父親と55歳の母親、6学年の長女である。父親は5学年で学校を辞めて、内戦下で軍隊に入った。母親は、学校が家の近くになかったことが理由で未就学。父親は、ゴムプランテーションのマネージャーとして働いている。マネージャーであるため、仕事内容はそれほど負担になっておらず、年に数か月は農場経営も行っている。世帯収入は、1か月約250ドルで、収入は十分だと感じていないと教えてくれた。6学年の長女の教育の為に、奨学金も受け取っているが、教育費の出費は大きいという。長女は、家事を手伝うこともあるが、学校の勉強にそれほど影響していないと言っていた。また、学校が好きだとも言っており、学校へはバイクを使って通っている。しかし、雨季は道の状況が悪くなるため、バイク通学が難しくなるという。

2軒目で話を伺ったのは、どちらも37歳の父母と、2学年の次男である。父親は未就学であり、母親は1年間だけ学校に通っていた。母親は、家事などで家を支える為、ドロップアウトしたという。ゴム農家として収入を得ており、この地域のほとんどがゴム農家であることを教えてくれた。ゴム農家として得られる収入は十分でないため、子ども達を中学校に行かせたいが難しいという。金銭的問題については、近所の人々や上司とも揉めることがあると言っており、とても悩んでいる様子だった。2学年の次男は、とても社交的でインタビュー中も近所の子ども達と楽しく遊ぶ様子が見られた。学校が好きだと言っており、学校は歩いて10~20分ほどの距離にあるが、両親がバイクで学校まで送ってくれるため、通学はさほど困難に感じて



※見せてもらった算数の教材

いなかった。また、使用している教科書を見せてもらったが、問題が記載されているだけの印象を受け、日本で言うところのドリルのように感じた。日本での教科書が固定概念としてあったがゆえに、この教科書では自宅学習をしたくても勉強しにくいのではないかと感じた。

2022年9月6日 コンポンチャムでの調査2日目。

午前中は、寺院学校で3人の副校長と、寺院教育を受ける一般生徒と僧侶にインタビューを行った。副校長の3人全員が、定年退職後に着任しており、そのうち1人は僧侶としての経歴を持っていた。この寺院学校の学生数は449人であり、男性のみ出家が許されているため、学生は全て男性である。そして、様々な年齢の学生がいることも寺院学校の特徴の一つである。また、この寺院学校の教員数は43人であり、そのうち5人は僧侶であった。この寺院学校を訪れた際、一番に感じたことは学校設備の綺麗さだった。副校長の話を伺うなかで、1日目に訪れた小・中学校よりも寺院学校の設備が整っている背景には、カンボジアの人々の寺院や僧侶への敬意・寄付があることが分かった。このように、公教育よりも良い環境である寺院学校の役割として、1人の副校長は、寺院教育は教育の機会拡大に貢献できるのではないかと述べていた。

次に、23歳の僧侶と24歳の一般生徒にお話しを伺った。寺院学校にも数人の一般生徒はいるが、元僧侶であることが多く、ほとんどが僧侶である。僧侶と一般生徒の教育カリキュラムは同じであり、寺院学校では一般科目だけでなく、宗教科目も組み込まれている。寺院教育でも高校まで卒業すれば高卒資格を得ることができ、一般の大学を受験することができるという。対象者の僧侶も高校卒業後は、大学に進学し、一般人として教員養成の学校に通い、将来は教師を目指しているという。一般生徒は、既に英語の教師を目指して大学に通っているが、クメール語を深く学ぶために寺院教育を受けていると教えてくれた。僧侶と一般生徒どちらもが、寺に住んでいるため、食費や家賃がかからず、とても助かっているという。

午後は、1日目に続いて2つの家族にインタビューをした。

3軒目で話を伺ったのは、24歳の母親と8歳の長男、62歳の祖母である。母親は2学年になるまで通学していたが、教師とのもめ事や家庭の貧困を理由にドロップアウトした。現在は、飲み物屋とゴム農家として収入を得ているが、十分な生活費は得られていないという。母親は、生後5か月の次男の子育てもあるため、農園作業を一時中断している。いずれ子どもが成長したときには農園作業を再開することを考えているが、ゴム農家としての仕事は早朝から始まり、家から遠いプランテーションまで歩いて行くため、とても過酷で疲れると教えてくれた。8歳の長男は、現在、生後5か月の弟の世話をするために小学校に通っていない。本人も家族も学校に通いたいと思っているが、金銭的に余裕がないこともあり、実現していない。将来の夢は、家族で営んでいる飲み物屋を拡大していくことだと教えてくれた。

4軒目で話を伺ったのは、31歳の母親と10歳の長男である。母親は4学年まで学校に通っていたが、家庭の貧困を理由にドロップアウトしてしまった。この家族もゴム農家で、母親はゴムの木を切

って得られる、ゴムの原料のラテックスを集める仕事をしている。プランテーションまではバイクで通っており、仕事に行くのはそれほど大変ではないと言っていた。仕事内容は、彼女が17歳のときに彼女の母親から教わったという。彼女は結婚16年であり、不足しがちな文房具等も彼女の夫が買っていた為、十分だった。10歳の長男は、学校でクメール語と算数を学んでいる。実際に使用している教科書や文具を見せてもらったが、農村部ではより紙と鉛筆が貴重であるため、小さな黒板を使って学習している様子が感じられた。



※3 軒目のご家族

3. 分析・考察

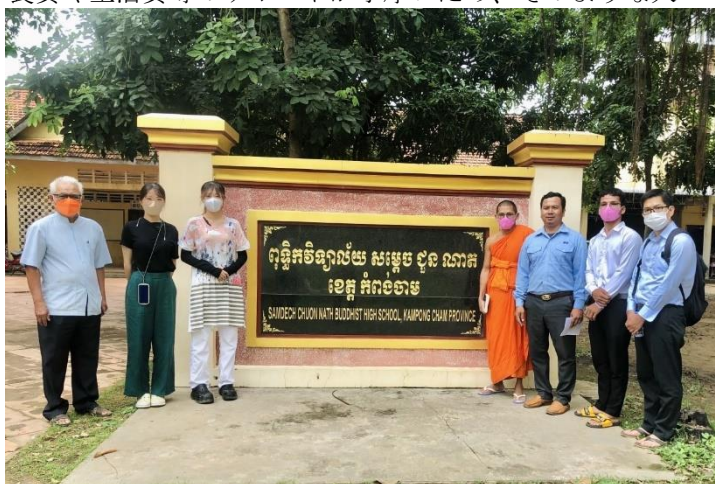
ここでは、カンボジア農村調査でのインタビュー結果を基に分析や考察を通して、カンボジアの高いドロップアウト率の背景にあるものや農村部の人々の教育の充実の為にはどのような支援が必要となるのかを考えていきたい。

まず、家族の収入源や労働環境に着目して比較を行う。今回、調査対象である4つの家族はゴム農家として収入を得ている点が共通していた。しかし、1軒目の家族はゴムプランテーションのマネージャーという立場であり、その一方で他の3つの家族は労働者の立場であるという違いがあった。マネージャーの立場である1軒目の父親は、ゴム農場で働くというよりも労働者を管理する仕事のため、それほど仕事内容は負担に感じていなかったが、反対に、労働者の立場である3軒目の母親は、悲しい表情で仕事はとてつらいと言っていた。1軒目と3軒目の家族はとても対照的で、1軒目の家族は奨学金を受け取っており、6学年の長女も家事等が勉強の妨げになることはないと言っていたが、3軒目の家族は母親が子育ての為に休職しており、8歳の長男は家庭的・金銭的事情で学校に通うことができていない。また、同じ労働者の立場でも4軒目の家族は夫の家族からの支えがあり、2つのバイクやスマホ、充実した文房具等を所持しており、苦しい生活ではあるものの、他の労働者家族に比べて、良い労働・学習環境があった。これらから、家族の収入源や労働環境、支援の有無は、子ども達が受ける教育の格差に繋がっていると考えることができる。インタビュー結果から、ドロップアウトしてしまう理由の多くが、家庭の金銭的事情であることが分かった。また、渡航前の事前学

習では、高いドロップアウト率の大きな原因の一つとして、両親らがポル・ポト政権の影響で十分な教育が受けられなかったために教育の重要性を広く理解していないことを挙げていたが、今回のインタビューを通して、金銭的に厳しい暮らしの中でも、どの両親も子どもに十分な教育を受けさせたいという明確な意思を持っていることを知った。決してカンボジアの人々が教育に価値を置いていないがゆえに、ドロップアウトをする子どもが多いわけではないということを知った。

次に、性別間の違いに着目していきたい。今回お話を伺った中学校の校長によると、ドロップアウトしてしまう生徒の多くが男子生徒だという。貧困家庭が多い農村部の男子生徒は、建設業や出稼ぎに行き働くことが多いからである。このように、男性が家族の稼ぎ頭になりやすい傾向はあるが、インタビューの対象家族は、通学歴に特に性差はなかった。今回調査したカンボジアの農村部においては、女性であっても経済的理由でドロップアウトしてしまうほど、貧困が大きな問題としてあると考えた。また、もう一つの性別間の違いは、寺院教育は男性のみに行われているという点である。基本的に出家が許されているのは男性のみであり、現在のカンボジアでは女性が寺院教育を受けることは難しい。公教育よりも学習環境が整っている寺院教育が、男性のみに開かれていることは、今後、進学や職業選択において大きな男女格差が生まれる危険を孕んでいると考える。

そして最後に、公教育と寺院教育を比較していく。公教育と寺院教育では、一部の科目を除いて同じ科目を学ぶことができ、高校卒業の扱いは同じという共通点がある。一方で、管轄が教育省と宗教省と異なっており、国教である仏教を支える寺院学校は寄付が集まりやすく、公教育よりも充実した施設や教材、教員が揃っている。公教育でドロップアウトする学生が多いなか、寺院学校はドロップアウトする学生がほとんどいない。寺院学校に通う学生の年齢も様々で、学びなおしをする人も多い。寺院学校に通う 95%が貧困家庭だが、食費や生活費等のサポートが手厚いため、そのような人々の受け皿のような存在になっている。また、寺院教育を受ける僧侶と一般生徒へのインタビューを通して、一番印象に残ったのは、将来への希望を生き生きと語ってくれたことだった。農村部の公教育を受ける生徒とその家族が、学校に通うことを諦めている一方で、寺院学校が持つ安定した教育はとても対照的だった。



※お話を伺った副校長と僧侶、一般生徒

これらを踏まえて、農村部の人々の教育の充実の為にはどのような支援が必要なのかを考えていく。カンボジアの農村調査を通して、受け継がれてきた伝統的な職や現地の人々の暮らしを知ったことで、外部からの支援はときに、それまで現地の人々が築いてきた環境を破壊する行為になり得るという恐怖を抱いた。新しい暮らしの形や事業を取り入れるのではなく、今ある暮らしや特性を生かした支援

の形が、家族を大切にしているカンボジアの人々にとっては最善だと感じた。そこで、私は、3つの支援の在り方を考えた。1つ目は、天然ゴムの市場規模の拡大と流通の改善である。インタビュー対象地域はゴム農家が多く、天然ゴムの取引を発展させることで、多くの家庭の収入増加が期待できる。具体的には、ゴムの木から得られるラテックスは腐敗しやすいため、カップランプやシート状に加工することで安定して取引を行えるようにしたり、約25年でラテックスは採取できなくなるため、その後家具の材料として販売する取引構造を確立したりする等である。収入の増加を図ることで、最終的にドロップアウト率の低下を目指したい。2つ目は、寺院学校や教員養成学校と公立学校の連携である。施設や教材、教員が不足している公立学校と寺院学校・教員養成学校を繋げることで、施設や教材、教員の共有を一般化し、公立学校の学習環境の改善を図りたい。カンボジアには、大学とは別に教員養成学校があり、そこには教師を目指す学生が沢山いるため、公立学校と連携することで、学生のうちから学校教育に携わる良い機会にもなると考えた。3つ目は、地域のコミュニティ開発である。調査全体を通して、学校や家族、農家同士の繋がりを感じる事が少なかった。通学や子育て、労働などを個人単位で行うのはとても大変である。これまで歴史的背景から家族単位で生活する形が作られてきたが、これからは地域単位で共に生きていくコミュニティを築き上げることで、地域共同体として助け合いが生まれ、生活しやすくなる。人との繋がりが充実すれば、農家の協働関係で仕事が安定する他、子ども達も通学や自宅学習がしやすくなり、ドロップアウト率の減少が期待できると考えた。

4. おわりに

今回のスタディーツアーを通して、改めてカンボジアは、貧困という大きな問題を抱えていることを感じた。そして、貧困は、健康や教育環境の悪さだけでなく、未就学・退学率の高さを引き起こしている。このような悲しい状況とポル・ポト政権という暗い歴史を持つカンボジアだが、7日間の滞在を通して、家族をとっても大切にしているカンボジアの方々の心の温かさと国全体として宗教が心の拠り所となっていることを知った。人との繋がりを意識した、この2つのカンボジアの特性を生かした支援の在り方を考えたいという思いが生まれた。また、カンボジアの貧困問題は渡航前も理解しているつもりだったが、実際にカンボジアに足を運び、現地の方々との関わりを経て、全ての人々が苦しい生活の中でも、家族を愛し、地元や職に誇りを持って頑張っていることを感じた。決して、怠惰でかわいそうだから貧困に苦しんでいるわけではない。現地に足を運ぶことの重要性をとっても感じた。今後もカンボジアの人々の誇りを大切にすることに留意しながら、カンボジアの全ての人々が教育を通して自らの潜在能力を拡大できることを目指して、自分なりに支援の在り方を模索していきたい。

参考文献

JICA（独立行政法人国際協力機構）（2019）「カンボジアにおける教育と職業訓練の現状」
[education_and_vocational_training.pdf \(jica.go.jp\)](#)、（2022年9月23日アクセス）

平山雄大（2008）「カンボジアにおける学校教育の諸段階—各教育段階の量（アクセス）の拡大に着

目して—」早稲田大学大学院教育学研究科紀要第 16 号、207-217 頁

北村友人 (2009) 「開発途上国の教育政策に対する国際機関の影響」比較教育学研究第 39 号、91-106 頁

Knoema(2015) 「カンボジア—純就学率」

<https://jp.knoema.com/atlas/%e3%82%ab%e3%83%b3%e3%83%9c%e3%82%b8%e3%82%a2/topics/%e6%95%99%e8%82%b2/%e5%88%9d%e7%ad%89%e6%95%99%e8%82%b2/%e7%b4%94%e5%b0%b1%e5%ad%a6%e7%8e%87>、(2022 年 9 月 23 日アクセス)

文化と教育が融合することの可能性

—カンボジア・コンポンチャム州におけるインタビュー調査から考察する—

教養学部 21LL048 久慈 綾香

1. はじめに

世界の多くの国で、教育の拡充は未達成の課題として取り組まれ続けている。カンボジアもそのうちの1つであり、教員不足や学生のドロップアウト、都市と農村の格差など多くの問題を抱えている。これらの問題が発生している場として注目されるのは公教育であり、これまで国内外を問わずさまざまなアクターによる取り組みがなされてきた。一方で、カンボジアでは古来より寺院が教育において重要な役割を果たしており、現在でも仏教系学校や「寺子屋」と呼ばれるものが運営されている。

しかし、事前の調査で得られたカンボジアの寺院教育や寺子屋に関する情報は少なく、その実態や社会における役割を掴むことはできなかった。それでも、古くから社会に根付き、現在では国教となった仏教を基盤とする寺院教育は、公教育とは違った利点を有している可能性がある。これを明らかにするために、本稿では、現在のカンボジアにおける寺院教育の実態と影響力、農村での学校教育の現状に焦点を当て、現地調査の結果をもとに、両者を比較する。調査は、同国東部に位置するコンポンチャム州で、普通学校関係者と家庭、宗教系高校関係者を対象に、インタビュー形式で行った。

2. 調査結果

2-1. 普通学校関係者へのインタビュー

以下では、小学校(Ou Prolos Primary School)と中学校(OML Junior High School)それぞれの校長と教員に行った調査の結果を報告する。

Ou Prolos Primary School は、児童 125 人(うち女子 49 人)と教員 5 人から成る。教員数は不十分であり、校長自身は田舎にあり給料が安いために顧みられないこのような学校を案じて、就任を希望したという。

また、人員だけでなく教材や設備のための資金も不足しているため、チャリティーが学校の運営に大きな役割を果たしている。実際に、入口の真上には、図1のように「この建物はアメリカの人々から贈られました」という文言が見られた。教員がしばしば教材の費用を自己負担したりすることもある。

それでも、いくつかの場面で教育事情は明らかに改善している。以前は多くの児童がプランテーションで働かなければなら



図1 援助で建設された学校の入口 筆者撮影

ずドロップアウトしていたが、現在ではそのような児童は年に数人程度にまで減少した。その一方で、同校の卒業生で高校まで修了した者はほとんどいない。

校舎の傍には児童向けにお菓子などを販売している簡易的な小屋があったが、周辺にはそのゴミが散乱していた。真横にはブランコや滑り台といった遊具が設置されていたが、錆びたり壊れたりしており、とても子供たちが使用できる状態ではなかった。

OML Junior High School は、生徒 188 人(うち女子 110 人)と教員 6 人から成る。このような不自然な男女比が生じている要因として、校長は、男子の方が建設作業員や出稼ぎ労働者として家族のために働くことが求められやすいためである、と述べた。生徒は 7・8 年生はそれぞれ 70 人以上在籍しているのに対し、9 年生は 33 人しかいない。1 年でおおよそ 20%の生徒が退学しており、男子の方が高い退学率を示している。教員 6 人のうち 5 人はコンポンチャム州出身であるが、全員が学校が位置する村ではなく街から来た人々である。残る 1 人は別の州出身である。教員は、1 人で複数の科目を全学年分担当している。

教育省から配分される予算も十分ではなく、特に同校のように小規模の学校に対して割り当てられる額は非常に少ない。そのため、施設の整備などはチャリティー頼みになってしまっている。しかし、ドナーによる支援も十分ではないようで、教室の木製のドアや窓枠などは所々脆くなっており、開閉に支障をきたしていた。

一方で、昔と比べて改善した点も見られた。以前、教科書は教員だけが所有し、生徒は教員が説明したことをノートに書き取って学習するしかなかったが、現在は生徒にも行き渡っている。教材や文房具はいまだに不十分である。

校舎の周辺には広い校庭があったが、確認できたのはサッカーゴールのようなもの程度であり、他の運動器具は見られなかった。駐輪場には生徒のものと思しきバイクが大量に停まっていた。

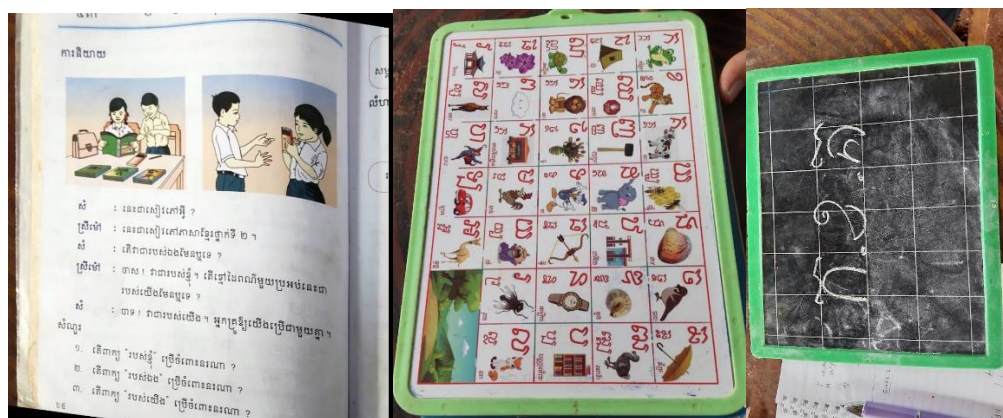


図2 右：無料の教科書(小学校用) 左：教材(生徒負担の場合有) 筆者撮影

2-2. 家庭へのインタビュー

以下では、ファミリーA から D の 4 家庭で行った調査の結果を報告する。

ファミリーA では、主に夫 Kosal(57)と妻 Sopheap(55)の 2 人にインタビューを行った。当初同様にインタビューの実施を予定していた小学 6 年生の長女に対しては、当日体調不良であったため、最小限の質問をするのに留めた。家はゴム林の一区画にあり、テレビらしき電化製品やウォーターサーバ

一のようなものが確認できた。

夫婦はこの地域に広がるゴムプランテーションで働いており、夫はそのマネージャーを務めている。夫は、読み書きはできるものの内戦下で軍に入隊するために学校を中退しており、また妻は近所に学校がなかったため一度も教育を受けたことがない。そのため、知識や特別な技能が必要とされない現在の職に就いた。仕事はそれほど負担ではないため、年に3か月ほどは小さな農場も経営し、鶏や魚を市場に卸している。世帯収入は月に250ドルほどであるが、生計を立て子供たちの教育費を支払うには十分ではない。奨学金を受給しているが、20ドルを年に数回程度であり、このままでは長女を中学校に通わせられない可能性がある。

長女は現在6年生であり、家事によって学習が阻害されることもなく、学校を楽しんでいる。通学手段はバイクであるが、雨季は舗装されていない道路がぬかるんでしまうため、いつも大変な苦勞を味わっている。

ファミリーBでは、夫 Vann(37)と妻 Toch(37)、小学2年生の次男 Sok にインタビューを行った。一家はゴムプランテーションでの労働から収入を得ているが、十分ではない。長男がより費用のかかる中学校に進学すれば、次男の教育費が足りなくなる恐れがある。母親は、生活や息子の教育費を巡って、近隣住民やマイクロファイナンス機関の関係者、上司としばしば口論になることがある。奨学金や生活支援などを受けたいが、個人や家庭の状況などを示す証明書がないために申請すらできていない。夫は学校に通ったことがなく、妻も小学1年生で退学したため、両親ともに読み書きができない。

Sok は、1人の教師から厳しく当たられることはあるものの、学校は楽しいと語った。学校は徒歩10分から20分ほどと遠くなく、父親がバイクで送迎することもある。

家屋は風雨に対して脆弱であるような印象を受けた。実際に、一家は雨季の雨漏りに悩まされている。同様の家屋が複数集まって1つの集落を形成しており、そのうちの何軒かには彼らの親戚が住んでいる。

ファミリーCでは、主に妻 Pheap(24)とその母親 Sam(62)、長男 Thai(8)にインタビューを行った。一家は現在、夫が勤めているゴムプランテーションと、非常に小規模な子供向けの飲料販売の経営から収入を得ている。店にある設備らしきものは、ゼリーを保存するためのクーラーボックスのみであった。正確な収入は計算したことがないため不明であるが、生活は苦しい。母親も以前ゴムプランテーションに従事していたが、出産と子育てのために退職した。生まれた子供は現在5か月であるが、その子が大きくなればまた仕事を再開するかもしれない。しかし、プランテーションの労働環境は午前1時から始まり、肉体的に苦しいものである。もし他に選択肢があるのであれば、この仕事は選ばないだろうと語った。

母親は、貧困と教員との確執という2つの理由から小学2年生で退学している。8歳の Thai は、自らも学校に通いたいと思っているものの、貧困と幼稚園の頃から続く体の不調により、未就学の状態である。家ではいつも弟の世話をし、近所の子供たちと遊ぶことはない。インタビュー中の様子からは、他の子供に比べてかなりシャイであるような印象を受けた。将来の夢は、一家で経営している店を大きくすることである。

ファミリーD では妻 Srey(34)と小学1年生の長男 leak にインタビューした。一家はゴムプランテー

ションでの労働から収入を得ている。日々の作業では重い物を持たなければならないため、過酷であると妻は述べた。母親は貧困のために4年生で退学し、10代半ばと現地の女性の中でも早い時期に結婚した。

長男は、学校は遠くなく、教師も好きであると語った。今はクメール語を、一文字ずつ書かれた日本語の50音表のようなボードを使いながら勉強している。

一家はバイクを夫婦それぞれのために2台所有しており、主に通勤時に使用している。しかし、土が表面で固まっていたり部品が錆びたりしており、状態は良いとは言えない。また、妻は兄から贈られたスマートフォンを、緊急時に職場と連絡を取るために使用している。

2-3. 寺院教育関係者へのインタビュー

以下では、Samdech Chuon Nath Buddhist High Schoolで副校長3人とカルト・宗教学科の見習僧の学生1人 Seak(23)、普通学生1人 Pheng(24)にインタビューを行った。学生たちとは英語でもコミュニケーションを取ることができた。

同校は学生449人と教員43人(うち僧侶5人)から成り、教員1人が担当する学生数は単純計算で約10.4人である。学生・教員ともにすべて男性であり、学生は就学年齢の若者から現職の僧侶、80歳以上の高齢者まで幅広い世代にわたり、多様なバックグラウンドを持つ。ただし、その95%は貧困家庭出身である。

1クラスは38人で構成され、見習僧の学生と普通学生は同じ教室・同じカリキュラムで学習する。比率は、普通学生よりも見習僧の学生の方が圧倒的に多い。授業は7時から始まり、正午よりも前に一旦終了し、13時から再開する。これは、上座部仏教の僧侶は正午以降に食事を摂ってはないためである。学生は普通科目と宗教科目を勉強し、また、パーリ語やサンスクリット語など仏典を読むための言語も習得する。卒業時に得られる資格は普通学校と同等であり、それをを用いて一般の大学を受験することも可能である。

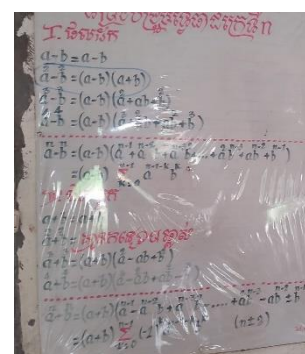


図3 高校数学 筆者撮影

学生は近隣の寺院に住み、そこから通学する。そのため、学費だけでなく食費や光熱費も負担する必要がない。それでも、そのほかの生活にかかる費用は自ら負担しなければならない。インタビューした2人の学生は、どちらも経済的な不安があると語った。

設備は充実しており、校舎だけでなく敷地内全体が清潔だった。普通学校と同様に国から予算が配分されているが、それよりも寄付が持つ役割の方が大きいという。同校は、寺院でもあるため寄付が集まりやすく、祭事のシーズンは特に多くなる。寄付は、同じ仏教関係者からも受けることがある。



図4 屋外に設置されたゴミ箱 筆者撮影

カルト・宗教学科に所属する見習僧の学生 Seak(24)は、貧困のために普通学校を退学し、数年遅れて同校に入学した。彼にとって特に魅力的だったのは、仏教系学校は普通学校よりも少ない年数で卒業可能であるという点だ。現在は寺に住み、毎日7時間ずつ週に14科目を受講している。将来は還俗し、教員になる予定である。経済的に不安はあるが、それ以外特に困っていることはない。校則によって、僧侶を目指す者はアルバイトが禁止されているが、カンボジアでは出家者が非常に尊敬されていたり、布施が根付いていることから、さまざまな場所で支払をせずに済むなどの経済的利点もある。

普通学生である Pheng(24)も、多くの学生と同様に貧困家庭出身である。高校で勉強するのは2度目であり、週末は英語教師になるために教育系の大学に通っている。現在は寺に住んでおり、生活費以外に特に不安はない。同校の施設・設備に関しては、大学に比べれば劣るものの、綺麗であると述べた。



図5 教室内の掃除用具
筆者撮影

2-4. 寺院教育の認知度に関するインタビュー

事前調査では寺院教育に関する情報が入手できず、現地調査をするにあたって、寺院教育はもう廃れてしまったのではないかという懸念があった。そのため、本調査ではすべてのインタビューの最後に「寺院教育・寺子屋について知っているか」という質問をし、農村部における寺院教育の認知度を測った。

結果は、若い世代を中心に、ほとんどの人は寺院教育について何も知らず、50代以上の人々も聞いたことがあるという程度であった。ファミリーCの Sam(62)によると、内戦中に僧侶が多くの子供たちに勉強を教えていたという。また、OML Junior High School には、ボランティアとして寺子屋で読み書きができない人々に授業をしている教員がいるという情報を得た。それでも、公教育と寺院教育の間に、関わりと呼べるものはほとんど存在しないようである。Samdech Chuon Nath Buddhist High School でも普通学校との関わりはないかと尋ねたが、授業の依頼があれば応じる程度で、特にそのようなものはないようだった。

3. 考察

3-1. 公教育と寺院教育それぞれの環境に関する比較

①財源としての寄付とその性質の違い

訪問した小学校と中学校に共通していた点は、どちらも以前よりは改善が見られたものの、依然として資金面や人材を中心に課題があるということである。今回の調査地のような農村部は、都市からの距離や生活の不便さ、児童・生徒数の少なさなどが要因となり、国からの資金や人材が集まりにくい。近年の急速な都市への一極集中は、児童・生徒数の都市-農村間格差を一層拡大させていくだろう。このような経済的に苦しい状況にある地方の公教育が頼みの綱としているのが、ドナーの存在である。調査した小学校と中学校はどちらも、国から配分される予算が期待できないため、施設の整備

はドナー頼みである、しかし、教室のドアや遊具が壊れたまま放置されたり、教材が不足したりしているなど、外部のドナーからの支援も十分ではないようだ。このようにドナーをあてにする状況が放置され続けた場合、教育の拡充における安定性と持続性が損なわれるうえに、住民が学校運営に関わる機会が減少する恐れがある。

仏教系高校もまた、寄付が学校運営において大きな役割を果たしているという点では公教育と共通している。しかし、彼らが受ける寄付の性質は、普通の学校が受けるそれとは異なっている。同校への寄付は、副校長らから得られた「寺院を元としているため集まりやすい」や「祭事のシーズンは特に多くなる」などという特徴から、慈善ではなく寄進という意味合いが強いということがわかる。また、見習僧の学生がしばしば支払を免除されることも、それと類似した性質を持っている。これらの現象が生じる背景には、寺院が昔から人々の生活の中心となってきたことと、寺院や僧侶への寄付を布施と見なし当然のものとする考え方という2つの要素が存在している。伝統的に、僧侶はカンボジアの生活の中で多くの機能を果たしてきた。たとえば、地域の冠婚葬祭では祝福の祈りを述べる者という役割を担っている(Samdech Chuon Nath Buddhist High School, 2010)。そのため、僧侶のいる寺院は、人々が集まる場所であり、地域の中心として認識されてきた。また、カンボジアでは、出家することは本人のみならずその両親にとっても功德となると考えられ、出家の経験者は尊敬の対象となる。このような僧侶への畏敬の念に加え、より多くの寺院で布施をすることが大きな功德を積み、祖先への回向となる(笹川, 2016, p.157)とされていることが、寺院への寄進という慣習が現在も存在し続ける理由であろう。訪問した仏教系高校が寄付によって支えられ、恵まれた設備を学生たちに提供できていたことも、同校が寺院教育の場として地域の中心にあり、コミュニティの人々の意識に仏教が強く影響していたからではないだろうか。

②学校周辺の美化

また、小学校ではお菓子を販売する小屋の周辺を中心に、ところどころプラスチックごみが路上に捨てられており、自然環境と学校環境どちらにも悪影響を及ぼしていることが推察された。プラスチックごみは土壌中でも分解されないため長期間その場に残り続ける。さらに、大雨などによって土壌が浸食されると、それらが川や水路に流れ、水質汚染や海洋への流出を引き起こす。また、学校が単に基礎教育を受ける場でなく社会規範や公衆衛生を学ぶ場でもあることを踏まえると、ゴミの路上放置が看過されていることは、そこに通う多くの児童の行動選択に悪影響を及ぼすだろう。

この問題の背景には、カンボジアの社会環境が関係している。カンボジアは近年人口増加や経済発展に伴い、ゴミの排出量が急増し、現行の廃棄物処理に負担がかかっている。アジア開発銀行や世界銀行から融資を受けたり(NNA ASIA, 2022)、ゴミ収集車が寄贈されたりしているが(大阪市 環境局総務部総務課広報グループ, 2021)、行政サービスの都市-農村格差が著しいことを考えると、農村にはそのような効果が波及しにくいだろう。実際に、調査地近くの道路横やゴム林にはゴミが至る所に捨てられていた。このように普段からゴミが放置されているような状況では、清掃の習慣が根付きにくい。同様の状況はカンボジアだけでなく多くの国で見られ、NGOをはじめとする各団体が、地域の美化や環境保護を引用しながら、現地で意識向上のための教育を行っている。

普通学校や村の周辺と異なり、清潔でゴミがほとんど路上に捨てられていなかった仏教系学校は、

この意識向上が宗教的理由によって達成されていると考えられる。仏教において、掃除は開悟の手段、人間修行の重要な方法として認識され、それは仏陀と弟子のやり取りの記録の中で表されている(沖原ほか, 1977, pp.43,44)。沖原らは、「このような仏教の掃除観が寺院教育などを通じて、学校での生徒による掃除に影響を与え」(p.43)ると推察している。

3-2. 寺院教育と農村の間の隔たり

以下では、上で述べたような寺院教育の恵まれた環境を支える背景を、公教育の現場にも形を変えて取り込むことの可能性について探る。まず、住民参加を広い意味での寄付と捉え、それを実現する可能性について考える。寺院に寄付をする理由であった「功德を積む」という考え方は、より簡単に言い換えれば「良い報いを期待して行動する」という投資のような性質があると解釈できる。これを踏まえると、教育のために投資をすることも一種の「功德を積むこと」とであると言える。教育によって、どのようなメリットが得られるのか、自分たちの生活をより良くするにはどのような知識が必要か、それを習得するためにはどのような設備や教材、どれほどの資金を集めればよいのかというトピックを全住民共通のものとすることの重要性は、「良い報い」が何であるのかを共有することで知ることができるだろう。しかし、そのためには、住民個人の時間的・金銭的な余裕や、ある程度調和のとれたコミュニティが必要である。調査結果を見る限り、ゴムプランテーションでの深夜労働やそれぞれの家庭の生活の苦しさは、学校運営へ住民が参加することの阻害要因となりうるため、調査対象地での実現は困難であるかもしれない。また、周辺を清潔に保つことがなぜ必要かを学ぶ際に、仏教の教えを活用できる可能性もある。国民の約9割が仏教徒であるカンボジアでは、見知らぬ団体が唱える美化や環境保護よりも、仏教の教えの方がよほど身近で、住民にとって腑に落ちやすいものになるのではないだろうか。

ここまでは、寺院教育の間接的かつ部分的な活用について述べたが、ここからは、寺院教育そのものがなぜ農村部では認知されておらず、積極的な利用がなされてこなかったのかについて考察する。寺院教育の場合、一般の学校と同等の卒業資格を得られるにもかかわらず、学費や生活費を削減できるというメリットを考えると、このようなものを潜在的に欲している人は多いだろう。しかし、農村では一般の人々はおろか、学校教員ですら寺院教育についてよく知らないという人がほとんどだった。これには、親世代の識字率や地理的な距離、両者を管轄する省が違うことなど、多くの要因が関わっていると考えられる。調査で明らかになった具体的な要素を挙げるのならば、文字が読めないためスマートフォンがただの電話機となってしまっていることや、住民の主な交通手段はバイクや徒歩であるため長距離の移動がしにくいこと、プランテーションでの労働時間が学校の就業時間とずれていることなどが、住民たちを教育に関連する情報から遠ざけている。また、たとえこれらの阻害要因が解消されたとしても、寺院教育が女子に対してあまり開かれていないことや、下宿するために親元を離れる必要があるという寺院教育のシステムそのものに付随する懸念点を考えると、情報へのアクセスが容易になったからといって、必ずしも農村部で寺院教育が普及するとは限らない。

4. 結論

今回の調査から、農村の学校は、教育事情が改善された今でも資金や人材の面で苦勞しており、学校環境は満足いくものではないということがわかった。また、寺院教育は、課題は多いものの公教育が整備されたことによって、もはや役割を失ってしまったものとして認識されていた。しかし、実際に訪問した宗教系高校では、十分な設備・人員と清潔な校舎、学生の経済的負担の軽減が達成されていた。そして、その恵まれた環境は、カンボジアの文化による面が大きい。寺院教育を支える宗教・文化や、寺院教育のシステムそのもののアドバンテージは、カンボジアの教育事情の改善に対してよい影響を及ぼしうるだろう。しかし、農村における家庭の経済力や情報へのアクセス、寺院教育そのものがはらむ懸念点を考えると、これらのアドバンテージの応用や普及は困難であるかもしれない。

また、公教育と寺院教育の比較という話題からは少々逸脱しているため本文では記述しなかったが、農村でのインタビュー中、住民の健康状態が懸念されるような場面がしばしばあった。訪問した4家庭のうちファミリーAとBの子供は、当日熱や頭痛などの症状を訴えており、ファミリーCの子供は、どのような病気かは質問しなかったが、長引く体調不良がドロップアウトの原因の1つとなっていた。また、ファミリーAの両親はインタビュー中何度も咳き込む様子が見られた。もちろん、このように多くの体調不良者が確認されたのは単なる偶然であるかもしれない。しかし、健康は教育を受けたり生計を立てたりするための基盤であるため、注視し、必要に応じて対処する必要があるようだ。

参考文献

- 大阪市 環境局総務部総務課広報グループ. “寄贈したごみ収集車がカンボジア王国で活躍しています”. 大阪市. 2021年6月28日更新. <https://www.city.osaka.lg.jp/kankyo/page/0000508654.html>. (2022年9月23日閲覧).
- 沖原ほか. 各国の掃除に関する比較研究. 日本比較教育学会紀要. 1997, 1977 巻, 3 号, p. 37-46. http://www.jstage.jst.go.jp/article/jces1975/1977/3/1977_3_37/_article/-char/ja/, (2022年9月23日閲覧).
- 大坪加奈子. “カンボジアのお盆「ボン・プチュン・バン」”. 在福岡カンボジア王国名誉領事館. 2010年11月1日更新. https://www.fukuoka-cambodia.jp/ohtsubo_blog/2010/11/post_12.php, (2022年9月23日閲覧).
- 笹川秀夫. “第5章 各国・地域の上座仏教 カンボジア上座仏教”. 上座仏教事典. パーリ学仏教文化学会上座仏教事典編集委員会. めこん, 2016, pp. 156-157.
- NNA ASIA. “ごみ排出量の半分、1日5千トン処理できず”. 2022年9月7日更新. <https://www.nna.jp/news/show/2390457>, (2022年9月23日閲覧).
- Samdech Chuon Nath Buddhist High School. “Buddhism in Cambodia”. 2010年8月26日更新. <https://scnbhs.wordpress.com/category/buddhism/>, (2022年9月23日閲覧).

初等教育・中等教育におけるドロップアウトの原因と教育の影響について

—カンボジア王国コンポンチャム州でのインタビュー調査—

教養学部 21LL084 菅沼 瑞生

1. はじめに

本稿では、なぜ途上国の農村部における就学率は低いのか、その原因を検証する。また、学校教育が日々の生活にどのように影響を及ぼしているのかも併せて検討する。ユニセフの「世界子供白書2021」によれば、カンボジアの初等教育の就学率は90%を超える一方で、修了率は73,5%であり、前期中等教育の修了率に至っては、40%と低い値になっている。筆者は、なぜこのようにドロップアウト率が高いのか疑問を抱いた。そこで、学校へのアクセスが悪いことや貧困で学費が払えないことがその原因であると仮説をたて、調査を行った。また、日下部(2020)によると、バングラデシュでは、修了証や学位といった学歴活用と就業・就職とのリンク、すなわち教育—職業接続のあり方が希薄であるようだ。そこで、学校教育を受けるだけでなく、得た知識が就職に活かされないと豊かな生活にはつながらないと知り、カンボジアの学校教育が日々の生活や就業にどれほど影響しているのか調査することにした。ここで、教育を受けることで職業選択の幅は広がるものの、農業の担い手が減るのではないかと、という仮説を立てた。調査では、カンボジアのコンポンチャム州にある農村を訪れ、小学校、中学校それぞれの校長先生と20-40代の初等教育のみを受けた4人の方、同じく中等教育まで受けた2人の方にインタビュー調査を行った。その結果、就学率の低さの原因は貧困と離婚などの家族の事情にあること、教育を受けても字の読み書きが満足にできず、学校教育が就業や日々の生活に十分に活きているとは言えない状況にあることが分かった。

2. 調査結果

2-1. 学校の校長先生

① 小学校校長先生

ドロップアウト率は毎年数パーセントであり、その理由は早朝に働くことや親の引越しで遠くに移住してしまうためだそうだ。親の仕事を手伝うため、ゴムのプランテーションで働く子どもは、早朝4:00に起きて働いてから午後のクラスに来る人もいる。そのため、疲れて勉強に集中できず、進度についていけなくなることから、ドロップアウトにつながる。また、家族の引越しによりやむを得ずやめなければならない人もいるという。家庭の貧困のために働く子どもたちに対しては、学校をやめないう校長が説得しているものの、簡単に解決できる問題ではない。校舎は2014年にアメリカの援助で建てられたが、足りない分は慈善団体や保護者からの寄付でまかなっているという。

② 中学校校長先生



毎年のドロップアウト率は約 20%であり、その理由は働かなければいけないからだという。中には、出稼ぎに行く人もいるようだ。学校の設備に関しては、昔は森の中に建っていた校舎だったが、現在は車が通れる道路が整備され、環境が整ってきたと言える。

両校長の話から、小学校と中学校ではドロップアウト率に大きな違いがあり、中学校のほうが高いこと、ドロップアウトする理由についての意見が異なることが分かる。両者ともドロップアウトの原因として家庭の事情を挙げていたが、小学校の校長は、親の手伝いや引越しを挙げていたのに対し、中学校の校長は、生徒自身が収入を得るために働かなければいけないことだとしている。

2-2. 農村の住民

① ソ・ペアさん (25)

彼は、現在、妻のチェン・リーさん (23) と就学前の二人の子どもたちと住んでおり、ゴム農園で働いている。学校には小学4年まで通っており、文字を読むことは少しできるが、書くことはできないようだ。また、特に学校に楽しい思い出もないようだった。それでも子どもたちには学校に行き、将来は学校の教員か銀行員になってほしいと思っているそうだ。また、子どもを学校に行かせるうえで一番難しいことは、制服や教科書を買うための出費ではなく、毎日お小遣いをあげることだと話していた。その用途を聞くと、食べ物を買うためだという。さらに、自身の貧困を証明するための貧困世帯証明書を持っていないことを教えてくれた。その証明書があると、病院の費用が半額になるなどの補助が出るようだ。周りに住む住民はその証明書を持っており、彼自身もその条件を満たしているにも関わらず、機会を逃してもらえなかったようだ。

② ニ・スレイモンさん (33)

彼女は現在、3人の子どもがおり、それぞれ小学校と中学校に通っているという。そして彼女自身は、ゴム農園で働いている。学校は、高校まで通いたかったようだが、家庭の状況や長女であるという責任から、自分で学校をやめるという決断をし、小学6年でドロップアウトしてしまった。学校をやめてからは親の仕事を手伝っていたという。学校では、友達と会ったり授業を受けたりすることが楽しかったそうだ。また、文字の読みや数字の教え方など学校で得た知識は生活に役立っていると聞かせてくれた。子どもたちには、家の手伝いをさせずに学業に専念させている。やはり日々お小遣いを渡しているが、特にそれが厳しいということもなく、今後もこの生活が続けられると話していた。

③ スレミヤンさん (27)

彼女も前の二人同様でゴム農園で働いている。以前は別の遠くの場所に住んでいたが、仕事のために引っ越してきた。学校は小学3年でやむを得なくドロップアウトしてしまい、読み書きはできないという。現在5歳の子どもには高校まで行かせたいと言っており、その理由として、今は子どもの面倒を見る人がいないため、友達を作ることを挙げていた。確かに、他の家からは少し離れたところに家があり、他の家族と頻繁にやり取りすることは難しそうだった。しかし、小学校に入れるにも、

その一番初めの段階が難しいという。その原因として、小学校の入学手続き等の情報が入ってきづらい状況があると考えられる。さらにその原因の一つとして、周りのコミュニティと離れていることとは別に、親が読み書きできないことが挙げられる。文字が読めないと、たとえインターネットが繋がったとしても、それを利用して情報収集することは困難である。

④ ナリさん (21)

彼女もゴム農園で働いており、就学前の子どもが一人いる。学校は、親を助けたいという理由で自ら小学5年のときにドロップアウトした。しかし、学校では友達と過ごす時間や本を読んだり算数の勉強をしたりする時間が楽しく、そのころの友達とは今も会って話をすることもあるという。文字を読むことが少しでき、数字も7までなら数えられるそうだ。なぜ7までなのか疑問に思ったが、それ以上深く掘り下げて聞くことができなかった。子どもの将来についてもある程度具体的なビジョンを描いており、彼女の夢であった医療スタッフか警察官にさせたいと言っていた。さらに、留学することも視野に入れて学校教育について友達と話すこともあるようだ。

⑤ パンタイインさん (35)

彼女は今回インタビューした他の家庭と異なり、雑貨屋を営んでいる。子どもは3人いて、それぞれ小学校と中学校に通っているという。学校は中学1年の途中でプノンペンへ出稼ぎに行くようになり、通学したり休んだりを繰り返すうちに退学してしまったようだ。学校では、ゴム縄跳びや読書、友達と料理をすることが楽しかったと語っていた。字の読み書きはでき、それが今の生活に役立っているとも言っていた。また、子どもには将来の仕事は自分たちで決めてほしいと願っている。お小遣いはあげているようだが、その用途を把握してはいないようだった。それでも、彼らの健康に気を遣い、スナックなどはなるべく買わせないようにしているとのことだった。加えて、この日々のお小遣いを払うのが難しい時もあるという。

⑥ タムシーヌーンさん (41)

彼もゴム農園で働いており、妻のハンソチアさん(35)と3人の子どもと暮らしている。ハンソチアさんは、両親の離婚により小学1年で退学せざるを得なかったという。タムシーヌーンさん自身は中学2年でドロップアウトしている。読み書きは多少できるようだ。タイや韓国に出稼ぎに行っていたこともあるようで、現在住んでいるところには遠くから引っ越してきたとのことだった。子どもには高校まで行ってほしいと思っており、特に医者になりたいと思っている子どもには大学まで行かせたいと話してくれた。



図2 スレミヤンさん家族と



図3 現地の子どもたちと

2-3. 分析

まず、回答者の方の共通点を整理する。一つ目の共通点は、ドロップアウトした原因として、ハンソチアさん以外の全員が貧困を挙げたことだ。中でも、出稼ぎに行く人、親の仕事の手伝いをする人、家事を手伝う人とドロップアウトの理由はさまざまだ。また、全員に共通する点として、自分の子どもには高等教育まで受けさせたいと考えていた。二つ目の共通点として、子どもへお小遣いを払うことが挙げられる。今回インタビューした6人のうち、子どもが既に学校に通っていたのは4人であり、そのうち3人について、子どもへのお小遣いに言及することができた。日本では、給食が出たり、お弁当を持っていったりするの、多くの場合、毎日お小遣いをもらう必要はない。お小遣いをもらうとしても日単位ではなく、月単位でもらう家庭が多数派だろう。人によっては、この毎日の出費が負担になっているということだった。学校に通えない理由を「貧困だから」と一言でまとめてしまうと学費が払えないのか、教科書や文房具を買うお金がないのかと考えがちだったが、実際には日々のお小遣いを支払うのが大変であるということが分かった。インタビューに答えてくださった方々は貧困で学校に通えないといっても、教育にかかる費用ではなく、日々の生活費が足りないから働かざるを得なかったという人もいると考えられる。

次に、インタビューした人たちの相違点として、子どもの将来をどこまで具体的に考えているか、という点が挙げられる。高校まで行かせたいという人もいれば、大学まで行かせたいという人、留学まで考えている人もいた。将来就かせたい職業に関しても、すべて子どもに任せている人もいれば自分の夢を子どもにかなえてほしいという人もいた。教師や医療スタッフといった職業を挙げる人もいたが、数多の職業がある中でこれらの職業を挙げるのは、彼らが今までかかわったことのある身近な存在だからだろう、と考えた。しかし、共通して農業に従事してほしいと思う親はいなかった。

さらに、教育と職業接続のあり方について、今回インタビューした方々はパンタイインさん以外の全員が学歴に関係なくゴム農園で働いていたことから、カンボジアでも教育と職業接続が希薄であると考えられる。多くの人が読み書きを十分にできなかったことから、肉体労働をせざるを得なかったのではないだろうか。そして、農園で働くためには引越しをしなければいけなかったのだろう。文字が読めなければ、インターネットなどを利用して情報収集しようにもできないため、選択肢が大幅に制限されてしまうことも考えられる。その例として、ニ・スレイモンさんのように、小学6年まで進学していても、読み書きが十分にできない人がいることが分かった。日本で小学6年生であれば一通

りの読み書きは問題なく行える。この二国間の差異が印象的だった。そこで、先述したユネスコの資料を見てみると、カンボジアでは、読解力において、最低限の習熟度に達した初等教育の最終学年の子どもの割合が50%であった。なぜこのような調査結果になったのだろうか。それは、日本よりも一週間当たりの勉強時間が短いことが一つの理由ではないだろうか。そもそも小学校は二部制で、一日あたりの授業時間は4時間であると小学校の校長先生はおっしゃっていた。また、住民の家には扇風機以外の空調設備や学習机、十分な照明が見当たらなかったことから、自宅学習の時間はほぼ取れないものだと考える。兄弟の面倒を見たり、家の手伝いをしたりすると余計に自分で勉強する時間が無くなってしまう。

最後に、日本との違いを考える。ドロップアウトの原因が貧困であることが分かったが、これは十分な補助金の制度があれば解決できる問題だと考えられる。日本では、義務教育のあいだは教材や文房具の費用、給食費の援助があり、高校に入っても奨学金制度がある。しかも、それを周知するポスターが学校の中に貼られていた。カンボジアの奨学金制度は十分でないという話をこのスタディツアーの間に聞いたが、たとえ制度が整備されていても、その情報が必要としている人の元へ届かなければ意味がないのではないだろうか。



図4 インタビューの様子



図5 ニ・スレイモンさんと

3. まとめ

今回の調査では、ドロップアウトの原因が貧困にあること、学校教育と就業の繋がりが薄いことが明らかになった。また、ドロップアウト率が高い原因として、親ではなく子ども自ら退学する事例が見受けられた。そのような事例では、退学を決めたのは子ども自身であるが、その背景には家庭の貧困がある。その裏付けとして、退学した人は親の手伝いを行ったり、働きに出たりしていることが挙げられる。そんな中で、同じ村に住む人が出世して豊かな生活を送り、ロールモデルとなれば、彼らから刺激を受け、自分から教育を受ける権利を投げ出す可能性が低くなるのではないだろうか。実際、小学校の校長は大学を出て、良い給料をもらい、豪華な家に住んだうえで、ドロップアウトしそうな児童に対して、なるべく学校に通い続けるよう説得しているという。このようなロールモデルの存在意義については、先述した日下部（2020）でも言及されている。

また、筆者が村に訪れて驚いたことの一つに、家ごとの境界線があまり意識されないことがある。老若男女問わず近所の家に訪れ、談笑していた。そこで、この村内の人の結びつきを利用し、子ども

たちが勉強を教え合う集会のようなものを作れないだろうか、と考えた。上級生の児童・生徒が下級生の児童・生徒に勉強を教えるのだ。こうすることで、学校でついていけなかった分を補うことができるし、教える側も自分の考えを整理する良い機会になるのではないだろうか。さらに、今回の調査では学校のカリキュラムや宿題の有無については調査しきれなかったので、なぜ最低限の習熟度に達していない児童・生徒が多いのか調べることを今後の課題としたい。

最後に、今回の調査に協力して下さったすべての方にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

日下部達哉（2020）「バングラデシュ農村の経済・社会格差縮減に対する教育開発の貢献—20年間の断続的研究結果から—」『国際開発研究』国際開発学会, 29（2）, pp.35-47.

（URL：https://www.jstage.jst.go.jp/article/jids/29/2/29_35/_pdf/-char/ja）

Unicef（2021）「表 11 教育指数」『世界子供白書 2021』 p.76.

（URL：https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/UNICEF_SOWC_2021_table11.pdf 2022年9月23日閲覧）